

女子國文新編

第二版 卷二

4b
810
昭5

42287

教科書文庫

4
810
42-1931
20000 80458

S6 1931

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

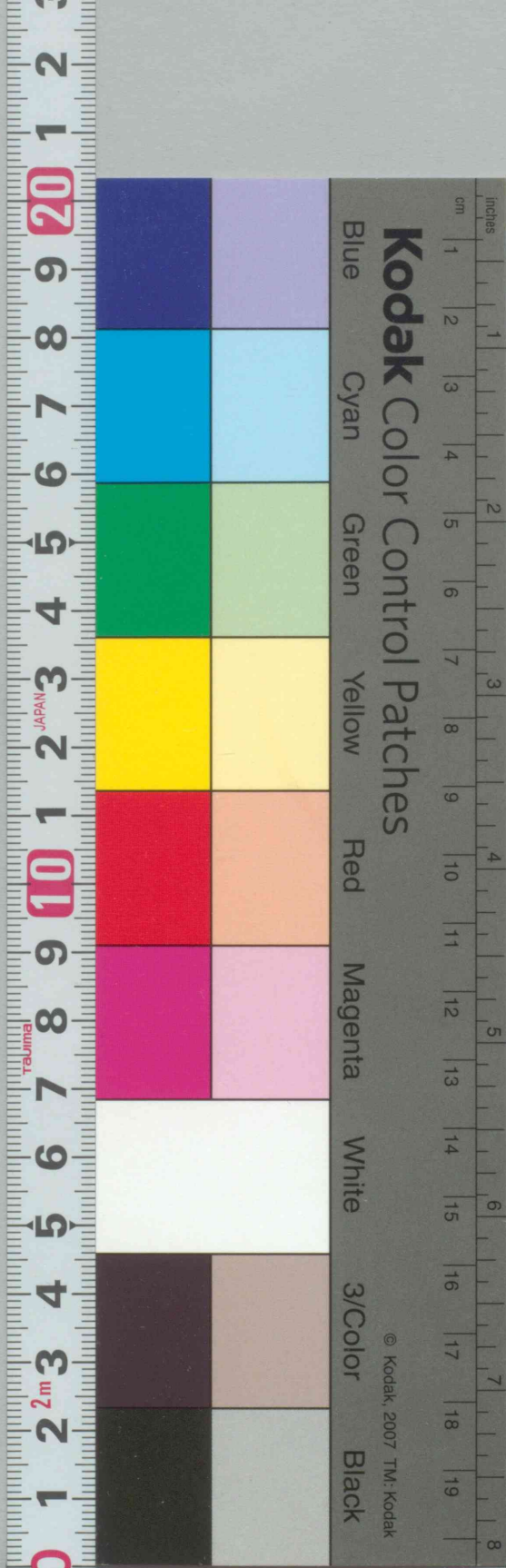


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

文部省檢定濟

高等女子學校國語教科書 昭和六年二月二十日

女子國文新編

第二版



東京高等師範學校教授
垣內松三編

46
810
BB6

女子國文新編

一 國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四 右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

目次 (卷二)

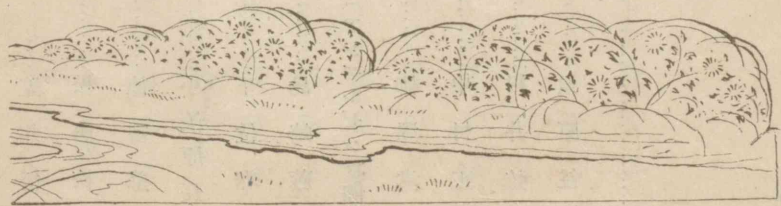
一 野菊	島木赤彦	四
二 國境	北原白秋	六
三 靖國社頭に立ちて	多門二郎	二
四 翼	吉江喬松	四
五 溪をおもふ	若山牧水	三
六 小鹿の家	鶴見祐輔	六
七 三人の時計	長與善郎	四
八 茶話	薄田泣菫	三
九 人生の急所をさめる人	羽仁もと子	六
一〇 心の置處	山本有三	六
一一 伊勢參宮	五十嵐力	三
一二 海濱の草	柳田國男	七

一三 明治天皇の御遺物を拜す	笠井信一	八
一四 櫻井驛	松居松翁	五
一五 維新の大精神	徳富蘇峰	一〇六
一六 鸚鵡	小笠原長生	一〇
一七 盲坑夫	下位春吉	一五
一八 茶の間	島崎藤村	一六
一九 マッチ賣の娘	(アンデルゼンお伽噺)	一四
二〇 雲萍雜志抄	柳澤洪園	一〇
二一 否の一語	中村正直	一五
二二 近江聖人の幼時	村井弦齋	一五
二三 樂訓	貝原益軒	一四
二四 詔書		一六

附録 語釋 字音假名遣一覽

一 野 菊

野菊の花を見てみると、
 水の流れる音がする。
 野菊の原のくぼたみに、
 泉が湧いて居りました。
 野菊の花を見てみると、
 こほろぎの鳴く聲がする。
 野菊の原の草の根に、
 蟲がかくれて住みました。



着眼點 音・形・影。
 その全てをつゝむしん
 とした律動。

野菊の花を見てゐたら、
 雲が通つて行きました。
 空に浮かんで行く雲の、
 影が花野に動きます。

蟲と泉の音のする、
 野菊の原はしんとして、
 雲の通つた大空は、
 いよ／＼青くなりました。

(島木赤彦)



島木赤彦 本名は久保田俊
 彦。歌人。大正十五年歿
 年五十一。

二 國 境

私は國境安別の砂濱に立つた。上つて見ると、沖から見た通りの荒涼たる寒村であつた。

とうとう國境まで来たのかと思ふと、ひえんと私は雨の湿りに顫へたが、また子供のやうに、そこらを駆け廻りたくもなつた。

「や、車前草だ。素敵々々。」

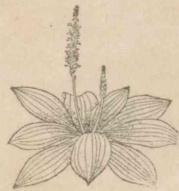
それは、樺太車前草とてもいふのだらう、すばらしく大きな葉だ。それが、踏めば實に柔かな緑を輝かしてゐる。砂濱から一段上ると、その車前草に縁どられた徑が續く。大勢通つたので、ひどい泥濘になつてゐるので、私は草の上を歩く。

着眼點 「國境まで来たのかと思ふ」と「子供のやうに」との二つになつた心もちが、終まで流れる(第一〇頁第四・八・一〇行参照)
荒涼—クワ、ウリヤヤ

「ひえんと私は雨の湿りに顫へた」

「子供のやうに」

車前草—おほぼこ



「や、驚いた、馬鈴薯の花だな。」

内地では五六月ごろの薄紫の馬鈴薯の花だ。莖の黄色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓から、女の子がたつた一人、面を出してゐた。その前の畑には、いかにも、雨に濡れた黄色の菜の花が咲き群れてゐた。それに豌豆の花、背の低い唐黍、葱坊主。その他鮮かな野菜の花。この暮色と初夏との色。

私は又びしやんと緑の上を歩いてゆく。雨が次第にあがりかけて来たが、まだ横なぐりに吹きつけることがある。間を隔ててぼつりと駐在所があり、郵便局があつた。それはバラック式の果敢ないものであつた。以前に國境守

漁師—れふし
「たつた一人、面を出してゐた」

豌豆—えんどう

バラック Barrack. 假小屋。

護の駐屯兵が住むために急造したといふ小舎のまゝであるらしかった。東洋風の簡素なものだ。

だが、何といふ巨大な虎杖であつたらう。それらの小舎のうしろ、丘の崖から下の裾まで叢生した虎杖の、早くも蟲がついて黄ばみかけた葉の間は、今まさに淡黄緑の花盛りであつた。それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目ざましさ！。私はまた立ちとゞまつて、これ等の始めて見る樺太の景趣に目を圓くした。

それは、燃え立つやうな細い赤い實の、つや／＼と群つた名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實。」
「ななかまど」

虎杖―いたどり



女郎花―をみなへし

「始めて見る樺太の景趣に目を圓くした」

ななかまど―七輪



と、一人の男の子が私の間に答へた。

風と雨とがまた激しく音を立て始めた。

「おゝい、おゝい。」

前から後から、わが團員の數々が、その風と雨と、しぶきで飛んでゆく霧の中から呼び應へる。

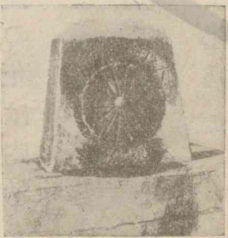
かうして、私たちは國境の天測點へと、草ばかりの一つの丘の頂邊を目ざして、泥濘のひどい小徑をうねり／＼して登りかゝつたのである。

そこらは虎杖の花盛りであつた。樺太虎杖の花は、内地で見るやうな、ほの／＼とした淡紅色を含めてゐないが、その緑がかつた薄黄は、却つて度ましくてあはれてあつた。それが雨と霧とに、濡れしづくになつてゐるのである。

「しぶきで飛んで行く霧」

天測點 天測境界點。天文測量に依つて境界の基礎を定めた地點。

太い丸太の無造作な二坪ばかりの周囲の柵があつた。その柵は朽ちかけて、既に外皮の處々はポロ／＼にくづれかけてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が嚴然と立つてゐるのだ。正方形の臺座に据ゑられた鼠色のその標石は、高さは二尺にも満たないであらう。北面に鷲、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の草叢にもはひつて見た。北を眺めると、その海岸線は南と同じやうな、さして高からぬ丘陵が続いて、立枯れのとゞ松の疎林が、しきりなく流れる雨雲の下にほう／＼と打煙つて見えた。寂とした國境であつた。(北原白秋の文による)



「境界標石が嚴然と立つてゐるのだ」

挿繪 日・露境界標石。

「私は露西亞領の虎杖の草叢にもはひつて見た」

「北を眺めると」

「寂とした國境であつた」

北原白秋 名は隆吉。明治十八年生。詩人。

三 靖國社頭に立ちて

昭憲皇太后の御歌

神垣に涙手向けて拜むらし

かへるを待ちし親も妻子も

を拜誦するにつけても、亡き戦友のことどもを思ひ起し、感激の涙に堪へないのであります。

私は日露戦争には一小隊長として、鴨綠江の戦闘を始め、遼陽・沙河・奉天と大小十數回の戦闘に参加し、負傷もしましたが、最後まで従軍しました。思へばこの間、多くの戦死者と戦場で別れましたが、いづれも皆、九段の御社に祀られ、護國

「義勇奉公の全國民的精神」(第二三頁 二行参照)

昭憲皇太后 明治天皇皇后 宮。大正三年崩。手向けいたむけ

「感激の涙」以下一節ごとの結語に見える感激の眞情の漸層。

鴨綠江 朝鮮の西北境。我が國第一の大河。
遼陽 滿洲奉天省の中部の都邑。
沙河 滿洲奉天省に在る河。太子河の支流。
「護國の神」

の神と仰がれて居る事を思ひ、自ら慰めて居るのであります。私の初陣は鴨綠江でありました。其の後、遼陽の戦には弓張嶺の夜襲に加はりましたが、僅か三十分で部下小隊の半ばを失ひ、中隊は一軍曹の指揮に委ねなければならなかつたのでした。當時の日記を見ると、

「私等の中隊は、忍び／＼て愈、敵前まぢかに接近した。もうよからうと、私は軍刀を抜くと同時に、『突込めッ』と一聲高く叫んで走り出した。わーッと云ふ突貫の聲と共に、隊が隨いて来る。其の以前に、私の右には第二小隊長飯野少尉が進むのを、かすかに見た。其の他は何ものをも見なんだ。私が軍刀を振りかざして飛びこむ途端に、露兵の銃劍がずらつと並んで居た。夢中で軍刀を打ちおろす。何でも、人

初陣—うひぢん

夜襲—ヤシフ

「當時の日記」

の頭か石かに斬りつけたと思つた拍子に、露兵の散兵壕の底にころげ落ちた。轉がつたが直ぐ起上つた。そして横に居つた敵に斬りつけた。敵は轉がりながら逃げた。すると、横から二人許りの露兵が突いて来る。軍刀で拂ひ飛ばす。さうすると、一度後へさがつて、一發撃つと同時に又突きだした。其の時大勢どつと飛込んで來た。私が眞先に獨り突入したので、直ぐ後から飛込んで來たのである。此の一團のために私は突飛ばされて、壕底の縁を踏みはづし、『しまつた』と思ふ間もなく、敵方の斜面にころ／＼落ちる。私の兩側一帯の敵は、此の勢に辟易して遁げるのか、或は私と同様に、私の小隊のものが飛込んだ拍子に突飛ばされたのか、たくさん轉げ落ちつゝある。私も此の露兵のな

大勢—おほぜい

かに一緒に混つて落ちたが、どうしても止らない。石塊が多いのと斜面が急なので、遂に五六米突落ちて、辛うじて止つた。途中で小さな木に衝突したはずみに軍刀を落した。直ぐに腰の邊りを探した。あッ、失敗つた。短銃は、生意氣に不要だと思つて、先刻、集合地で背囊の中へ仕舞ひ込んで置いて來た。もう夜は明けかゝつて、一米突も近寄れば顔が見える。無論、將校たる標識として私の左腕に附けて居る白布は判然とわかる。無手では仕方がない。これで殺されるのかな。と思ひながら、兎に角出来るだけ這ひあがらうとして居ると、私の兩側に止つた露兵が、私を見付けて同時に突込んで來た。ちやうど四つ這ひになつて居る所で、運好くも兩方の劍は、右と左の中指の尖端を擦つて、

標識へッ

「止つた」

砂利にぐさと突きこむ。之と同時に上の方から、露兵か日本兵か知らぬが、轉がつて來て、右側の露兵に突きあつた。其の勢で、此の露兵は下へ轉がつて行つた。もう左側の敵だけだと思つて見ると、之は銃劍だけ其の儘にして、私を突くと同時に遁げたのか、突く時の勢で、斜面の急なるために倒れて轉げ落ちたのか、もう影がない。

先づ助つたと思つて、早くもとの散兵壕まで戻らうと這ひ上つたが、身體が疲れて、如何に一所懸命になつても容易に登れない。氣が揉めてならぬが、身體が利かぬので仕方がない。此の時又、上の方から日本兵が一名飛込んで轉がつて行く。おい、おい、と叫んだが、下へ落ちて終つた。高橋上等兵らしい。すると上の方で、上等兵時田茂

吉の聲で、『小隊長殿、小隊長殿。』と呼ぶ。『此處だ。』と答へると、勢ひ込んで下りて來た爲に、哀れ上等兵は、私の所で止ることが出來ずに、ずん／＼轉けて行く。時田々々と呼んだが、返事もせずに轉げ落ちる。可哀相な事だと思ふのみで、今は私も途方に暮れた。又二歩許り四つ這ひになつて登り始めると、上で『中尉殿、中尉殿。』と言ふ聲がする。『太田か、此處だ。早く來い。』と私が叫ぶ。從卒の太田榮三は、『あ、其處ですか。』と言ひながら下りるやうである。……』と書いてあります。

私は、太田從卒の拾つて呉れた軍刀を再び手にした。從卒は左手に私を引つ張り、右手に追ひすがる敵を突飛ばしつゝ、もとの占領した壕に歸り、直ぐあとより押しよせて來た

哀れーあはれ

敵の逆襲を邀へて、再び激しい接戦となりました。私は腑甲斐ない小隊長でありましたが、下士卒は、何れ劣らず壯烈なるかけ聲と共に劍戟の妻まじい音を立て、火花を散して奮闘しましたのは、二十年後の今なほ、目に見ゆるやうです。

大正九年春、津野將軍の隸下に屬し、諸兵連合の一隊を指揮し、沿海州のデカストリー灣に上陸して、五月下旬、雪融けの満々たる黒龍江を下航して、尼港の同胞救援に向ひ、六月三日同地を占領しましたが、時既に遅く、遂に日本人の一人だも救援する事が出來ませなんだのは、衷心慚愧の至に堪へませぬ。此の占領と同時に、餘燼なほ炎々たる中を潜り、軍隊の大部は敵を各方面に追撃し、一部のものには焼き盡くさ

腑甲斐なし 『あがいなし』

の聲

『二十年後の今なほ目に見ゆるやうです』

津野將軍 陸軍大將津野一輔

デカストリー灣 尼港の南方開宮海峡に面した港。

尼港 ニコライエフスク。黒龍江の河口に近くある開港場。

餘燼ーヨジョン

れたる尼港の市街を隈なく探し、生残者が一人でも何處にか潜んで居りはせぬか、遺留品の一片もがなと、一同血眼で調べました。其の時に尼港監獄のはき溜の中から、日本兵の通信手工兵一等卒香田昌三の手帳を發見し、取る手遅しと之を讀みまして、非常に驚きました。何故ならば、數日間杳として消息不明であつた尼港の狀況は、此の日記に依つて明瞭となつたからであります。

通信兵は随分忙しい職務で、戦時は、不眠不休の勤務をなすものであります。此の香田一等卒は、其の多忙なる間に、初からの模様を事細かに記載してをります。

「三月十一日、赤衛軍參謀長ハ我ガ本部ニ來リ、日本軍ノ武器・彈藥ヲ借入レ度キ旨申込ミ、若シ應ゼザレバ武力ヲ以

遺留品—キリウヒン

杳—エウ

「此の日記に依つて明瞭となつたからであります」

「不眠不休の勤務」

テ借受クル旨、其返答ヲ十二日正午迄ニナスベキ旨傳ヘ去ル。依テ我ガ軍ニ於テハ、十二日午前二時ヲ期シ、敵ヲ襲フベク計畫成ル、勿論決死ノ目的ナリ。

其夜襲ハ大略次ノ如シ。

石川大隊長ハ六十餘名ヲ以テ敵ノ本部ヲ包圍攻撃スル豫備隊トシテ、水上大尉ハ二ヶ小隊ヲ以テ敵本部ヲ包圍スベク、後藤大尉ハ二ヶ小隊ヲ以テ共ニ敵本部ヲ包圍シ、先ヅ機關銃、小銃ヲ以テ攻撃スルト共ニ火ヲ點ジ、火災ヲ起サシム。敵ハ時ノ過グルニ從ヒ、各所ヨリ現ハレ戦フ。我が軍ハ第十一中隊トノ連絡ヲナス能ハズ、加フルニ大隊長始メ窪田大尉、副官、軍醫等、大隊長ノ指揮スル隊殆ド敵彈ニ斃ル……………」

包圍—ハツキ

小銃—セウジュウ

かう云ふ様な書き方で、又別に通信日記と云ふのがありまして、自分の任務と同僚の事などを細かに述べて居るの
で御座います。十三日の通信日記には、次の様に書いてあり
ます。

「山根一等卒ハ中途ニ於テ水上大尉ノ率キル一隊ニ加ハ
リ、奮戦ノ後、本部ニ引揚ゲントスル際、敵ノ一齊射撃ヲ受
ケ、名譽ノ戦死ヲ遂グ。之午前四時半ナリキ。
此時、本部ハ敵ノ包圍ヲ受ケ、砲小銃ノ猛射ヲ受ケ、危機ニ
迫ル。加フルニ人員、糧食少ク、亦防備不完全ナルニ付、中隊
引揚ニ決ス。香田一等卒ハ電報原書、通信書類、電話機、其他
ノ兵器ヲ焼却シ、現字機ヲ破壊ノ後、消耗品、被服ニ火ヲ點
ジ、高田主計以下十八名ト共ニ中隊ニ引揚グ。時ニ午後八

同僚ドウレツ。

猛射マウシヤ

焼却セウキヤク

時ナリ……………」

此の日、バルチザンから日本兵營を攻撃せられて、大隊本
部の防禦困難のなかに、敵に證據品や
利用品を與へざる處置を完全に遂行
した沈着剛膽の有様が、能く現れて居
ります。私は香田一等卒が孤立無援、重
圍の中に在つて、敵彈を物陰に避けな
がら、覺束ない蠟燭の灯かけに、残り少
なの鉛筆を走らす可憐の姿を想像し
て、感激を禁じ得ないのであります。そ
して九段坂上なる尼港殉難者の記念碑を仰ぎ見るたびに、
いつでも此の兵卒の事を思ひ出すのであります。世に軍神



遂行スキカウ

「沈着剛膽の有様が能く
現れて居ります」

挿繪 東京九段坂上、尼港
殉難者記念碑。

「感激を禁じ得ないので
あります」

と仰がる、將校もありますが、又それ〴〵分に應じてその任務を遂行し、從容として國難に殉じたる多數の隠れたる勇者あることを思ひ、社頭に立ちて感慨一層深きものがあります。

明治以後には、陸海軍人、地方官、外交官、警察官、看護婦、永夫、從僕、職工等、あらゆる職業の人々を網羅し、朝鮮に於ける同胞



「分に應じてその任務を遂行し、從容として國難に殉じたる多數の隠れたる勇者」
「感慨一層深きものがあります」
從容—シヨウヨウ

嘉永六年(二五—三)

挿繪 靖國神社。

別格官幣社 功臣を祀る社格。

維新—キシン

網羅—マツラ

も既に十一柱合祀せられてあります。一言にしていへば、階級を超越して、義勇奉公の全國民的精神を祀つたのであります。故に外國の貴顯使節等の御來朝の節は、必ず之に參拜すること、恰も英吉利、佛蘭西、白耳義、伊太利等に於ける無名戰士の墓や、亞米利加に於けるアーリントンの墓地と同様であります。是等の諸國にては、それ〴〵其の記念日を國家の祭日と定め、公私の儀式を行ひ、以て國民精神の振作に努めて居ります。

今靖國社頭に立ちて亡き戰友の功績を偲び、國家のために神靈の加護を祈れば、莊嚴の氣そ〴〵ろに身に迫るのを覺ゆるのであります。(多門二郎の文による)

超越—テリエツ

「義勇奉公の全國民的精神」

アーリントン Arlington

ワシントンの郊外。

「其の記念日を國家の祭日と定め」

多門二郎 陸軍中將。第二師團長。

四翼

私は小高い丘の上に立つてゐた。
澄みきつた秋の空は紫紺の色をたゞへて、無数の星がび
か／＼光つてゐた。

私は丘の上の草の中に腰を下して、じつとして居た。すう
つ、すうつと草の葉が擦れ合つて、下の野の方からは、蟲の聲
が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、椋の樹の葉
の落ちた枝が、細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むや
うにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音

【瞻眼點】第二・三課以
來、内面的に深まつて來
た精しい叙述。

「丘の上に立つ」

「澄みきつた秋の空」

「草の中に腰を下す。」

「椋の樹の葉の落ちた枝
が……その光を掴むや
うに」

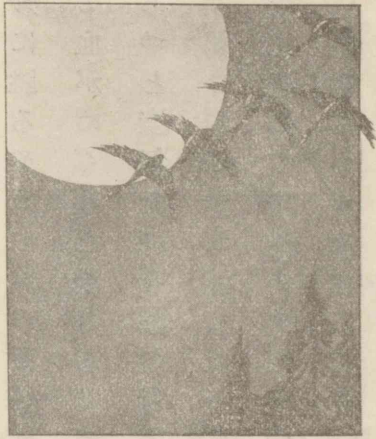
「空氣を切つて飛ぶ物
音」

がする。はつと思つて私は頸をすくめて見上げた。はつきり
見極められないが、薄黒い鳥の影が列をなして行くのが目
にはひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續する。
空氣が揺れて、顔へ頸へ冷たく當る。と思つてゐると、心が
妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ちだした。體軀中波立つ
て血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臓の響と、さあつ、さ
あつと空氣を切る翼の音とは、調子を合はせて鳴つてゐた。
翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が
空を滑つて先へ／＼と移つて行くと、冷たい空氣は幾重に
も幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大き
くなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲
の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立

「心が妙に跳るやうで、
胸の動悸が高く打ちだ
した」

「波動」その調子をとり
揺れる草の音、蟲の音。

つて揺れた。黒い空氣の波の振動、私の心臓もその中につままれて、ゆるく鼓動を立ててゐた。



ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黒く黄枯れた草の上へ敷かれて、蟲は今目を醒ました様に争つて聲を立てた。私は月の方へ向つて、胸へ深く光を吸ひ込んだ。

月の光の下に、瓦の屋根の並んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騒がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黒く見えてゐるばかりで、焼け跡かなにかのやうだ。

「黒い空氣の波の振動」

「野は明るくなつた」

「深く光を吸ひ込んだ」

「都會が見え出して來た」
「焼け跡か何かのやうに靜かな都會。」

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、藪蔭がぼつり／＼立つてゐるのも見えた。ふるへるやうな水溜も見えた。光の波が、今度は空にも地上にも漲り溢れてゐた。私の體軀の細い血管の中迄も、その波がくゞり入つて、體軀全體がすつきり透りでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつと、また物音が空に聞えてゐた。私はまた、はつと思ふと、動悸が打出した。何物かの襲來を受けたやうに、頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の體軀よりも一層低

「光の波」
「丘の下の野。空にも地上にも漲り溢れた光の波。」

「その波がくゞり入つて」

「さあつ、さあつと」
「風を切る物音。」

く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の来る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽ばかりの雁が横に並んで、ゆるく羽を搏ちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高く昂げて、勢好く舞つて行く。群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには舞ひ行く鳥の影が、草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果ての低い空には、大きな星が澄んだ光できらきらしてゐるのも見える。

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖ろしさと不思議さに、思はず聲を立てようとした。私の生が、形の異なつた、羽を持

「十羽ばかりの雁の群」

「草原の上を流れる鳥の影」

ち翼を持つた私の生が、いま目の前を翔つて行く。周囲が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが、空にも地上にも充ちてゐるやうな気がした。

暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍遠く隔つて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黒いものが、ずん／＼空を流れて行くやうだ。光の波を掻き亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に、奇妙なりズムを響かせて行くのだ。

鳥の過ぎた後の野原は、またひとつそりとして、月の光が枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團にまでも射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽く迄も吸つてゐた。

(吉江喬松の文による)

「私の生が」「形の異なつた私の生が」「これだけのものがそれ／＼」「いま目の前を翔つて行く」にかかつて居る。

「光の波を掻き亂し」「恐らく作者は飛んで行く黒い鳥に、魂の姿を感じて居るのであらう。

「鳥の過ぎた後の野原」

吉江喬松 明治十三年生。
早稲田大學教授。フランス文學講座擔任。

五 溪をおもふ

溪のことを書かうとして心を澄ましてみると、さまざまの記憶が、さまざまの背景を負うて浮かんで来る。

秋のよく晴れた日であつた。ほつかりした氣になつて、池袋停車場から出る武藏野線の汽車に乗つた。廣々した野原へ出て、思ふさまその日の日光を身に浴びたかつたからである。一度途中の驛へおりたのであつたが、そこらの野原を少し歩いてゐるうちに、野末に近く見えてゐる低い山の姿をみると、是非その麓まで行きたくなり、次の汽車を待つて、その線路の終點驛飯能まで行つた。着いた時はもう日暮で、

「着眼點」 「水の幻、溪の面影」(第三七五頁参照)

池袋 東京府北豊島郡の町。東京市の西北。武藏野線 池袋・飯能間の鐵道。

「野末に近く見えてゐる低い山の姿を見ると、是非その麓まで行きたくなり」

飯能 埼玉縣入間郡の町。

引返さうとすると、非常にあわたゞしい氣持で、その日の終列車に乗らねばならなかつた。それに何といふ事なく疲れてもゐたので、とう／＼そこに泊つてしまつた。

翌朝早く起きて散歩に出た。やうやく人の起き出た町を、そのはづれまで歩いて行つて、私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。

飯能といへば、野原のはての低い丘の蔭にある町だとのみ考へてゐたので、そこに見事な溪が流れてゐるようななどは、夢にも思はなかつたのである。少なからず驚いた私は、慌てながらその溪に沿うて



「思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した」

少しばかり歩いて行つた。眞白な砂洗はれた巖、その間を澄みとほつた水が浅く深く流れてゐる。急いで宿屋へかへつて朝飯をしまふなり、私はまたすぐに引返して、すつかり落ちついた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を上つて行つた。

溪をはさんだ山には紅葉も深く、大きな杉の林もあつた。細長い筏いかだを流す人たちにも出會つた。

ゆる／＼と歩いて、その日は原市場で泊り、翌日は名栗まで、その翌日、長い峠にかゝるとともに、その溪はいよ／＼細く、終には路とも別れてしまつた。そして落葉の深い峠を越すと、そこにはまた新たな溪が流れ出してゐた。

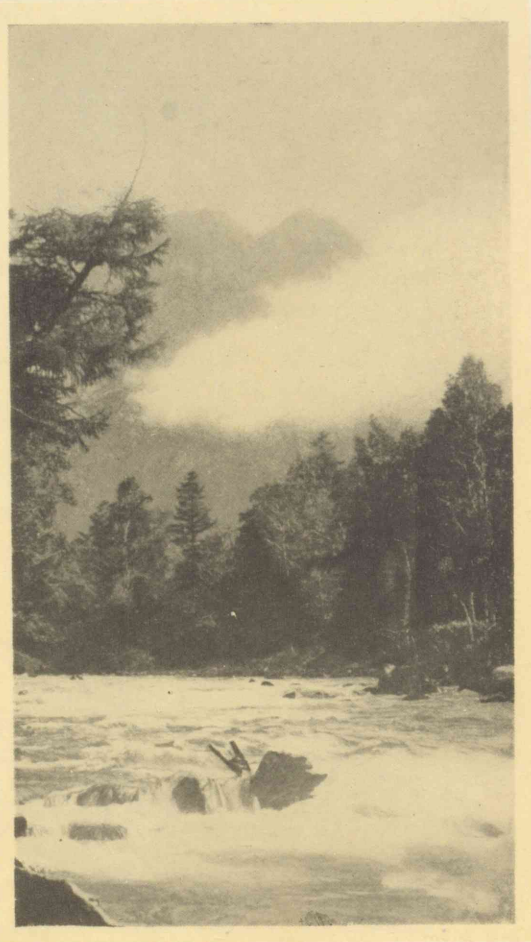
朝山の日を負ひたれば溪の音さえこもりつゝ

「浅く深く流れて居る」
「急いで宿屋へかへつて」
「山際の路を上つて行つた」
「長く句をつゞけて短く」を切つてない。

「細長い筏を流す人たちにも出會つた」の「も」を透して見る溪の景色。

原市場・名栗 共に埼玉縣入間郡にある村。

「終には路とも別れてしまつた」の「も」に含める意味。
朝山の：朝早く溪流の岸に佇んで、じつと眺めてゐる山の背に朝日が顔を



てう沿に溪

霧たちわたる

鶴つる來きてもこそをれ秋の日の木洩日うつる岩

かげの淵ふちに

おどろく／＼とどろく音のなかにゐてまむかひ

にみるいはかげのたき

淺瀨あさせ石川いしかわといふのは、津輕の平野を越えて日本海の十三

瀨せに注ぐ岩木川の上流の一つである。そこきりて鱒の上るのが止るといふ荒い瀨のつゞく邊に、板留といふ小さな温泉場がある。

温泉は川の右岸に當る斷崖の中腹に二個所と、その根がたの川原に接した所に一個所と、一二丁づつの間隔を置いて

出した。と霧がもく／＼と立ちこめて来て、今まで見えてゐた眺めを隠してしまつた。川のさらさらと流れる音が、その霧にこもつて聞えるといふのであらう。「朝山の」の「負ひたれば」の「たれば」の用法。

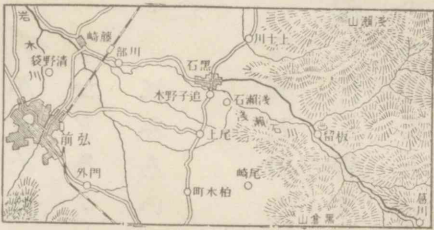
鶴つる……「來てもこそをれ」と「も」こそ「で強めたので、岩かげの淵に」と鶴つるを見出して、非常に嬉しく思つてゐる心が現れて居る。下の句「岩かげの淵に」は字餘りの句であるが、「來てもこそをれ」といふ重い言葉に對して釣合がとれて居る。

おどろく／＼……「まむかひにみる」といふのに、瀨と向きあつてゐる作者の位置を見る。それは「岩かげの淵」であつて、あたりの岩壁に反響して、その水音がこもつて一層烈しくなる。「なか」と「に」「ゐて」に作者の定位が見

て湧いて居る。

私の好んで入つたのはその斷崖の根の温泉で、入口には
蓆むしろが垂してあるばかり、板の壁はあらかた破れて、湯の中か
らでさへ溪の瀬がよく見える。

或日の午後、ほんやりとひとりて浸つて
ゐると、次第に湯がぬるんで來た。氣がつく
と、板壁の根の方から溪の水がひそかに流
れ込んで來てゐるのである。四月の廿日前
後であつたが、その日あたりから急に雪が
解け始めたらしく、溪の水の濁つて來るの
は判つてゐるが、かう急に増さうとは思はなかつた。呆氣あきげ
にとられて、裸體のまま、小屋の外に出てみると、赤黒く濁つた



える。
淺瀬石川 一名、黒石川。
青森縣南津輕郡。
津輕 弘前市附近の汎稱。
舊津輕領地。
岩木川 岩木山の西南麓に
出て、十三湯に注ぐ。土
地の人は専ら大川と呼ん
でゐる。

「ほんの僅かの間に……」
前に「溪の水の濁つて來
るのは判つてゐた」とい

水が、ほんの僅かの間に全く川原を浸して流れて居る。丁度
その對岸の木立のなかに、——そのあたりにも水が流れ
込んでゐた。——網を提げた男が一人、あちこちと歩いてゐ
る。雪解を待つて鱒は上つて來るといふ事を聞いてゐるが、
彼は今それを狙つてゐるのらしい。やがて、また一人あらは
れた。

雪が解けそめたとはいへ、四邊の山は勿論、ついその川岸
から、まだ眞白に積まれてをるのである。その雪と、濁つた激
しい溪流と、珍らしく青めいたその日の日光との中に、點々
として動いてゐるこの鱒とりの人たちが、いかにも寂しい
ものに私の眼には映つた。

雪解水岸にあふれてすゑかすむ淺瀬石川の鱒

ひ、湯に入る時も溪の水
は目に入つてゐた筈で
あるから、文字通り「ほ
んの僅かの間」であるこ
とを知る。「呆氣にとら
れ」た心持もそれで想像
出來る。今まで見えてゐ
た「川原を浸して」しま
つたといふので、その増
し方も思はれる。

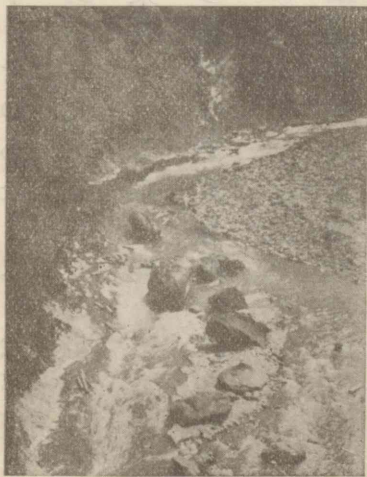
「いかにも寂しいものに
私の眼には映つた」仰げ
ば珍らしく晴れた空、雪
に映る日の反射、その大
きい活動の自然の中に
動いてゐる鱒とりの人
たち。

雪解水： 歌の表には、鱒
とりのむれが寂しいとい
ふ主観を出してないが、
「岸にあふれて」に盛な流
のさまが思はれ、「すゑか
すむ」といふのに大きな眺
が思はれる。その淺瀬石
川に蓋いてゐる鱒とりの
むれに心を引かれたので

とりのむれ
むら山の峽かより見ゆるしらゆきの岩木が峯に
霞たなびく

水上へくと急ぐころ、われとわが寂しさを噛みしむ
るやうな心に引かれて、私は
あの利根川のずっと上流、僅
か一足で跳び越すことの出
来るやうに細まつた所まで
わけ上つたことがある。

狭い兩岸には、もうほの白
く雪が来てゐた。斷崖のかげの落葉を敷いて、ちよろくと、ち



ある。
むら山の：山が重なり合
つてゐる。その間に一段
高く、青空に白く岩木山
(一名津輕富士)が突立
つてゐる。そこに霞がか
かつてゐる。前の歌は眼
が地に並行してゐる。こ
れは仰いで見てゐる。

利根川 源を上野より發
し、武藏・下總の國境を流
れ、栗橋町の東を過ぎて
二分し、再び關衙にて合
し、銚子に至つて海に注
ぐ。

「僅か一足で跳び越す」
關東の大河利根川の源、
山の奥の溪の幽けさ。

よろくと流れてゆく、その氷のやうに滑かな水を見、まだ
らな新しい雪を眺めた時、私は身じろぎすら出来なかつた
ことを覚えてゐる。今思ひ出しても神の前にひざまづくや
うな有り難い尊い心になる。

水のまぼろし、溪のおもかげ、それは實に私の心が正しく
ある時、靜かに澄んだ時、必ずのやうに心の底にあらはれて、
私に孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる。

(若山牧水の文による)

幾山河越えさり行かばさびしさの果てなむ國ぞ今日も
旅行く (若山牧水)

「私は身じろぎすら出来
なかつた」

結語と序語との響。

「水のまぼろし、溪のお
もかげ」

「孤獨と寂寥のよろこ
び」

若山牧水 名は繁。歌人。
昭和三年歿、年四十三。

六 小鹿の家

ある晩、いつものやうに長い夜話をした後で、

「明朝、私が面白いことをしますから、皆さんお立合ひください。午前十時ですよ。」

メーヨーさんが、輝いた眸を睜りながらさう言つた。一同が、それを合圖に立上つた。

「グード・ナイト。」

婦人たちが先に、部屋を出ていった。

そのあくる日の十時、みんなが揃つて、メーヨーさんの後について、花壇の傍を過ぎて、牛小舎の彼方の、杜の傍の白く塗つた平家建の家に這入つていつた。初秋の日射しが、雨の

「明るく輝いた」(第四三頁、文の結語)

メーヨー アメリカの女流評論家。
「輝いた眸を睜りながら」

平家建一ひらやだて

やうに、杜と芝生と白い家との上に降り灑いでゐた。

長方形の部屋は、五間に三間程の大きさ、床に花蘆を敷き、天井は梁の見える儘の作りにしたところに、野趣が溢れて



ある。窓五つは、大きい部屋に物足らない。それが部屋を薄暗くして居る。素朴な小机二脚、木の椅子五六脚、左手の奥には大きい煖爐があつて、その横にふくよ

挿繪 メーヨー夫人。

かな長椅子一つ、室の色は黄色と黒と薄浅黄、ところどころに朱全體の感じが、和蘭の舊都にあるやうな落ちつきを見せて、塵一つ落ちてゐない。

「和蘭の舊都にあるやうな落ちつき」

煖爐には、新しい薪が積んである。メイヨーさんがその前に坐ると、皆もそれらの椅子に腰を下した。靜かにメイヨーさんが話し出した。

「私は今日の來ることを待つてゐました。それはこの小さい家を初めて開くハウス・ウォーミングをするためであります。この家には由來があります。二年前、私の友達が小鹿を一頭贈つてくれました。そこで私もはこの小舎を建てて、此の小鹿の家にしてやりました。優しい眼を持つた可愛い生物でありました。或朝私がいつもの通りに、餌をやらうと思つて小舎の戸を開けますと、嬉しさうに飛びついて來る彼女の影も姿も見えませんでした。ふと見渡すと、小舎の後の板戸が大きく破れて、狼藉な足跡がありました。疑ひもな

「新しい薪」

「私は今日の來ることを待つてゐました」

ハウス・ウォーミング
House Warming.

狼藉——ラッゼキ

く近所の猛犬が夜中忍び込んで、優しい小鹿を喰ひ殺したのであります。その悲惨な出來事のために、私の心は深い傷を負ひました。防備なき小鹿が猛犬の牙にかゝつた夜半の光景が、どうしても私の心頭から離れませんでした。私は病氣になる程、これが可哀相に思はれました。

あくる年、私が三ヶ月程旅行して此處に歸つて來ますと、何時の間にか小鹿の小舎が、こんなさつぱりした書齋になつてゐました。それはモーカが、私の留守に造りかへてくれたのです。そこで私は考へました。可憐な小鹿の魂を、どうかよい仕事によつて記念してやりたい。その最も相應はしいことは、世界平和の事業に此の小さい家を獻げることである。私の世界平和運動の著述はみなこの家で書かう。しかし

「防備なき小鹿が猛犬の牙にかゝつた夜半の光景」

モーカ 人名。

そのためには、この家開きを大勢の外國のお客と一緒にしたい。さう思つて、私は今日を待つてゐたのであります。今お集りの方々の中には歐洲の方、東洋の方、亞米利加の方がある。宗教では、新教、天主教、それから佛教の方がある。さうして皆、國際的精神の涵養といふ事業に働いて居られる方々である。かういふ方々の手によつて、このさゝやかな家が開かれ、かゝる人々によつて永く記憶せられるといふ事でありましたれば、嗚や、あの小鹿の靈も嬉しく思ふであります。私は佛教の事は知りませんが、あの輪廻の説に深い懐かしみを感じます。凡ての生物に靈を認めるといふ哲理に、幼少の折から愛着の心を懐いてゐました。ですから、小鹿の靈を、かうして弔つてやりたいと思ふのであります。

「私は今日を待つてゐたのであります」

輪廻—リンネ。「リンネ」と發音する。

愛着—アイヂャク

こゝには英國の船に乗る若い方々も居られますが、よく今日の私の話を記憶して、全世界の港を渡つてゆかれる時に、異なる人種と、異なる生物との一切に、あなたの深い同情と理解とを持つやうなお心掛であつて下さい。さあそれでは、この煖爐の薪に火を點じませう。私はこれから名前を申しますから、その順に點火して下さい。鶴見さん、それでは貴下が一番先にこの火をつけて、この小鹿の家を温めて下さい。」

自分は黙つてマツチをすつた。火があかゝと煖爐に燃えた。パチ／＼と音がして大きい薪がパツと燃え上ると、薄暗い部屋の中の一同の顔は一時に明るく輝いた。

(鶴見祐輔の文による)

「深い同情と理解とを持つやうなお心掛」

「黙つて」

「薄暗い部屋の中の一同の顔は一時に明るく輝いた」

鶴見祐輔 明治十八年生。東京帝國大學卒業

七 三人の時計

甲・乙・丙の三人が或處へ行かうと思つて、その時間を相談しました。

「一時半の汽車にしよう。」

と、甲がいひました。

「よろしい。しかし今は何時だらう。」

と、乙がいひました。

「一時十分前だ。」

と、自分の時計を出して見て、丙がいひました。

「君の時計は合つてゐるのか。」

と、乙が聞きました。

着眼點 この對話に含める意味。

一 自分の時計を飽くまで信ずる丙。

「君の時計は合つてゐるのか」

「あゝ、僕の時計は正しい。きつちりドンに合はせたのだから。」

と、丙が答へました。

「いつ合はせたのだ。」

と、甲が聞きました。

「三日前だ。」

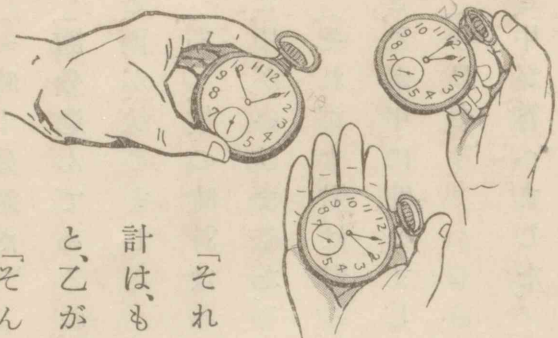
と、丙が答へました。

「それでも君の時計が後れる質なら、君の時計はもう正しくはないだらう。」

と、乙がいひました。

「そんなことはない。僕は僕の時計を信ずる。」

丙はまたきつぱり、かう答へたあとで、甲に聞きました。



「あゝ、僕の時計は正しい。きつちりドンに合はせたのだから」
ドン 最近まで東京市に於て全市に正午を知らせるために發した砲聲の模倣語。

「それでも君の時計が後れる質なら、君の時計はもう正しくはないだらう」

「僕は僕の時計を信ずる」

「君の時計は何時だ。」

「一時十分過だ。」

「随分進んでゐるね。」

と、丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない。」

と、甲がいひました。

「それでも、君は君の時計を、いつドンに合はせたのだ。」

と、乙が甲に聞きました。

「昨日だ。」

と、甲が答へました。

「昨日。それなら三日前にドンに合はせた丙の時計よりはあてになるかも知れないぢやないか。」

二 自分の時計を全く信じない甲。遂に丙の時計に合はせてしまつた。

「あゝ、僕の時計はあてにならない」

「昨日。それなら…あてになるかも知れないぢやないか」

「うん。併し僕には僕の時計は信じられない」

「そんなあてにならない時計を持つても、仕方がないぢやないか」

三 自分の時計の性質を知つてゐて、適當に信ずる乙。

「うん。しかし僕には僕の時計は信じられない。なんだか違つてゐさうな氣がする。」

と、甲が俯向いて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つても、仕方がないぢやないか。」

と、丙が罵つていひました。

「僕の時計に合はせ給へ。」

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。」

甲はかういつて、自分の時計を、丙の時計に合はせました。

「君の時計は何時だ。」

丙はまた乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「いつドンに合はせたのだ。」

「一昨日だ。」

と、乙が答へました。

「やはり進む質だね。」

「いゝや、僕の時計はどちらかといふと、少し後れる質なのだ。だから多分は一時五分過ぐらゐだらう。」

と、乙がいひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ。」

と、丙が笑ひながらいひました。

「うん、少し位は違つてゐるかも知れない。併し大した違ひはない筈だ。こゝから停車場迄はどのくらゐかゝるだらう。二十分あれば澤山だ。だから、まだゆつくりしてゐてもい

い。」

と、丙がいひました。

「しかし今が一時五分過とすれば、あと二十五分しかないのだから、僕は一足先に出かけるよ。いづれ停車場で會はう。」

乙はかういつて出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

甲と丙とは、かういつて笑ひました。しかしそれから暫く経つて、甲と丙とが停車場へ行つた時、乙は二人にいひました。

「汽車はもう出てしまつたよ。僕は間に合つたのだが、君達を待つてゐたのだ。」

甲と丙とは、驚いて顔を見合はせました。

「一足先に出かけるよ。」

四 三人三様の態度が生んだ結果。

「それでは、僕の時計は違つてゐたのかな。」
と、丙が顔を赤くしていひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計があつてゐたのだ。」

「さうかなあ。」

と、甲がぼんやりしていひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね。」

「さうだ。自分を知つてゐる者が一番利口だ。時計は信じられる爲にあるものだ。信じなければ、それは何の役にも立ちはない。間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのは固より悪いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、それを信じなければ、間違つた時計を持つてゐると同じことだ。又

「丙が顔を赤くしていひました」

「さうかなあ」と甲がぼんやりしていひました。

五 信すべきを信ずるのが最も賢明である。その人だけが汽車に乗れる。

何にも持たないのと同じことだ。間違つた時計を信ずる者も、正しい時計を信じない者も、なほ汽車に乗ることが出来ない。それは両方とも馬鹿であるからだ。自分を知つて、信ずべきものを信ずる者だけが、汽車に乗ることが出来るのだ。」
乙はかういひました。(長興善郎の文による)

「今何時でせうか？」一人の紳士が、金時計を出して見ながら、さう訊いた。訊かれた人は首を傾けて、どうも當になりません。んが……」といつて、モーニングのポケットに時計を収めた。折よく通りかゝつたボーイを呼止めて時間を訊くと、ニツケル時計を出して、九時二十分ですと答へて去つた。

世間には、之に似たことが少なくない。人生には眞の能力を要求する。現實の結果を生む原動力は、狂へる金時計の類ではない。(西村眞琴の文による)

長興善郎 文學者。明治二十一年生。

西村眞琴。理學博士。北海道帝國大學水産専門部教授。

八茶話

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃古今傳授を受けた、たつた一人の男は彼だつたといふので、歌の方の造詣もほゞ察することができよう。茶も上手で、とりわけ料理がうまかつた。この方では相當自信を持つてゐた利休なども、幽齋の前には一寸頭があらなかつたらしく、ある時などはわざ／＼頼んで、鶴の料理のお手前を拜見に往つたことがあつた。

幽齋が頼才があつて、歌の詠み口の早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連れ立つて烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顔を揃へてゐるのを見て、

「細川二つちよつと出にけり」

といつて、ちよつかいを出された。すると、幽齋は即座に、

「御所車通りしあとに時雨して」

とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇乞ひして歸らうとすると、烏丸殿はわざ／＼玄關まで見送つて出られたが、こつそり家來の一人に耳打ちをして、だしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突倒させた。おそろしく近代的なお公家さまで、歌よみを優遇するよりも、苛めることを知つてゐる。そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まご／＼してゐる間に、

【應眼點】 かるい言葉のたはむれ。

細川幽齋 名は藤孝。慶長十五年（二二七〇）歿、年七十七。
古今傳授—コキンデン

造詣—ザウケイ

利休 ソウエキ 千宗易の號。泉州堺の茶人。天正十九年（二二五一）歿、年七十一。

お手前—おてまへ

三齋 細川忠興の號。正保二年（二三〇五）歿、年八十二。

烏丸家 藤原光廣をいふ。寛永十五年（二二九八）歿、年六十。

御所車—ごしよぐるま

式臺—しきだい

苛める—いぢめる

「細川殿たつた今、一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。すると、幽齋は腰を擦りくゞ起きあがりさま、

「とんとつくころりと轉ぶ幽齋がいつの間よりか歌をよむべき」

と歌つたので、悪戯なお公家さんも手を拍つて嘆賞するよりほかに仕方がなかつた。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、どうぞ歌一首のうち「ひ」の字を十入れて作つてみてほしいと、難題をいひ出した。

幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやうなことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

「たつた今」

所望—レ—ヨマサ

「日本の本の肥後の火川の火打石日々にひとふたひろふ日人々」

と、詠んでみせた。大名はこりずに、またくゞ難題を出して、今度は、歌一首のなかに「木」を十本詠み込んでみせてほしいといひ出した。

箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の造作もなく、有合せの楡と椽と桐と檜と柿と椎と松と杉と柚と桑とを詠み込んで見せたものだ。

すると、大名はぜんまい仕掛の玩具でも見せられたやうに、首を捻つて感心してしまつたといふことだ。

歌の話が出たから、これは幽齋ではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑が、ある時さるお公家さ

山崎宗鑑 天文二十二年
(二二二三)歿、年八十九。

まを訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃えらい發明をした。それは歌のどんな上の句にでも、くつ附けることの出来る下の句だと、出来ることなら農商務省に願ひ出て、專賣特許でも取つておきたいやうなことをいひ出した。宗鑑がどんな句だと訊くと、公家は自慢さうに、

「といふ歌はむかしなりけり」

といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺をよせて笑つた。

「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

といつて、それにつけても金の欲しさよといふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自

「むかしなりけり」

「お公家さまのお詠みになつた」

趣向—シユカウ

分の知つてゐる古今集や百人一首のいろんな歌にくつ附けてみた。ところが妙なことには、この下の句はどの歌にもよく附いて、少しの縫目がみえなかつた。

「それにつけても金の欲しさよ。」

實際よく附くと思はれたのに不思議はなかつた。そのお公家さんは、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。(薄田泣菫の文による)

元朝の見るものにせむ富士の山
手をついて歌申しあぐる蛙かな

(宗鑑)

縫目—ぬひめ

古今集 古今和歌集。二十卷。最初の勅撰和歌集。百人一首。天智天皇より順徳天皇に至る百人の歌人の歌一首づつを撰び集めたもの。
薄田泣菫 名は淳介。明治十年生。詩人。大阪毎日新聞社客員。

九 人生の急所をきめる人

今こゝに十人の人が車座になつて、雑談に耽つてゐると
 します。話がだん／＼だれて来たことを、すべての人が感じ
 てゐます。すると、その中で一人、もう歸らうぢやないか。」とい
 つて立上る人があります。すべてさういふ風な働きをする
 人を、私は急所をきめる人といひたいと思ひます。人生の大
 きい舞臺にも小さい場面にも、必ずさうした急所がありま
 す。その急所々々をよい方面にきめてゆく力を養ひ持つて
 ある人は、運のよい人、運の強い人で、反對に、その急所にふれ
 ることを避け恐れる心持に支配されがちな人は、運のわる
 い人、運の弱い人なのだと思ひます。またその急所々々を悪

【着眼點】 「自己を見つ
 めて行くこと」(第六四頁
 第二行参照)

一 實例(二)
 「雑談に耽る」

「急所をきめる人」

急所—キフシヨ

「運のよい人・運の強い
 人」

「運のわるい人・運の弱
 い人」

い方向にきめてゆく人は、力の強い悪人で、ある點までは運
 が強いやうに見えますけれど、その人は遂に滅ぼされるか、
 でなければ悔い改めて善人になる人であります。
 この急所をきめる力があるかないか。唯そのことが運の
 よい人と悪い人とをふり分ける急所なのかと思はれます。
 運のよい悪いばかりではありません、人間がこの世の中に
 生れて来て、毎日々々營々として暮してゐます、その仕事
 ものになるか、ならないかも、やはりその毎日する仕事、始
 終急所をきめてゆくやり方か、急所を避けるといふやり方
 か、その二つによつてきまるのだと思ひます。物の急
 所といふものは、いつでもまた必ず難所なのです。そこ
 へ力をこめて、よい方向に廻轉したら、もうその仕事、九分

「急所をきめる力」

悔い—く。

「力をこめて」

通り成就してゐるやうに思はれます。

急所は難所で、廻轉しにくいものですけれど、小さい仕事でも大きい仕事でも、急所を目がけて、そこに力を入れなくては、どんなにまめに、こつくと働いてゐても、到底物にはならないで、骨折損の草臥儲といふやうな、毎日または一生を送つてしまふことになると思ひます。

人と對談をしてゐる時でも、その人にほんたうにいひたいこと、いはなくてはならないことがあるのに、どうしてもそれに觸れることが出来ないで、ぐづぐづと他のことをいったり、可笑しくもないのに、つい笑つたりしてゐる時ほど、自分の意氣地なさを感じることがありません。思ひが内に熟した時は、起てといふ嚴かな命令が私達に下つてゐるの

「急所は難所」

到底—タウテイ

草臥儲—くたびれまうけ

ほんたう

可笑し—をかし

意氣地—いくぢ

「嚴かな命令」

です。その命令を本氣に聞いて、ためらはずに起つ人は、日々自分の將來のために、幸な運命、強い運命をつくりつゝ進んでゐる人です。

私たちは永久に祝福される運の強い人になるためには、なさんと欲する所をなさなくてはなりません。さうしてそのなさんと欲する所のことは、まだ低くても、まだ貧弱でも、めい／＼の全生命によつて深く望まれることとでなくてはなりません。迷ふ時には、深く長く思はなくてはなりません。しかし思ひにのみ偏すること、支配されることは、本能にのみ偏することと擇ぶ所がないのです。常に全生命を活動させて、急所をつかみとつては、それを足場にして進まなくてはならないのです。急所をつかんで足場にすることは、毎

「全生命によつて深く望まれること」

本能—ホンノウ

日々の生活の中でも、十分に氣をつけたら練習の出来ることです。

若しも自分たちが部屋を掃く時に、いらぬものがそこにあつても、そのままに、置き場所のないものがあつても、その置き場を考へないで、たゞ掃けるだけの所を掃くといふやり方であると、だん／＼に部屋の中がちらかつて、遂にやう／＼坐る所があるだけになるでせう。私達の心の中の世界も同じことです。自分に對しては勿論のこと、他人に對しても、かうあつてはならない、かうありたいといふことは、部屋の中からいらぬ物を運び出し、入用なものを新たに替ふるやうな、急所にふれてゆくやり方をしないでゐると、だん／＼に相互の心は雑物のために狭められ、廣く深くふれ

六二 「練習の出来ること」

二 實例(三)
「部屋を掃く時」

坐る―すわる

雑物―ざぶもつ

合つて、互に味ひのある有益な交りを経験することが出来なくなる。親子、兄弟、夫婦の間でも、めい／＼に狭い、味氣ない

心を抱いて、火鉢の前や机の前にぼつんと坐つてゐるやうな状態になります。かういふ、よい運が向いて来る道が塞がる状態になると、それと反對に、どんな隙間からでも入つて来る悪魔の息が、かうした一人々々の側に、好んで通つて来るやうに思はれます。

私たちは何といふ榮えと幸の中に造られたものでせう。この五尺の身體の中に、ありとあらゆる天地間の生命の種類を藏め、それがまた意味深い人倫のつながりによつて、五六人家をなして棲む所にも、あらゆる人生の仕事が縮寫されて備はつてゐるのです。

味氣ない―あぢきない

「あらゆる天地間の生命の種類」
藏め―をさめ。

私たちは自分自身をさまざまの知識に照らし、さまざまの場合に當てて、どこまでも深く自己を見つめてゆくことによつて、宇宙のあらゆる神祕にたづね入るべき門をひらくことが出来、それらの立場において、ほんたうにそのよき家庭をつくることによつて、限りなく廣い人生にふれ、またその全體に向つて働きかける緒をひらくことが出来、ます。不思議にも、どこまで微妙につくられた私たちの生命なのでせう。私は妻と、また親と子と、互にほんたうの話の出来る人は、全人類に向つて演説の出来る人であり、自分の家をほんたうによく整へることの出来る人は、全世界を治め得る人だと思つてゐます。

雑談の場合でも、部屋の掃除でも、私たちのふれる日常の

「自己を見つめてゆくこと」と

「よき家庭をつくること」と

「微妙につくられた私たちの生命」

「全人類に向つて演説の出来る人」

「全世界を治め得る人」

三 「急所に向つて頭と手とを働かす」

「多くの急所の中の急所」

好運—カウウン

場合において、常にその急所に向つて頭と手とを働かせるやうに、自分をも他人をも深く見て、やはりほんたうにいひたいと思ふこと、したいと思ふことをするやうにする、それが即ち急所であり、自分の第一要求であります。常に自分の一身、自分の一家と、範圍の狭い生活にならないやうに、私達の見る所を廣くして、いくつもの急所が目に入つて来る時は、多くの急所の中の急所を選んで手をつけること、それがまた大いなる急所です。それらの場合の急所、即ち難所を處置してゆくことは、また同時に、常に目のつけ所のよい、骨の折れる緊張した生活をする事になり、それは即ち好運に到る確かな道だと思ひます。

世の中には、なるべく急所を避けて、當りさはりのない生

き方をずることを賢いことだと思ふ人が多いやうですけれど、さういふ考へて長く暮してゐる人は、はじめはよい頭を持つてゐても、だん／＼に物の急所を見る目が鈍くなり、とう／＼人生の急所の分らない人になつて、賢いつもりで目をつけたことが、皆あてが外れることになりす。運の悪い人といふのは、即ちそれだと思ひます。

私たちは、自分をも人をも、皆よい運命の下に生れてゐるものであることを信じたいと思ひます。(羽仁もと子の文による)

あらゆるまことに偉大なるものは、目立たない生長の中に、徐々に成し遂げられるものである。(セネカ)

「急所を見る目が鈍く」

「皆よい運命の下に生れてゐる」

羽仁もと子 思想家。「婦人の友」主幹。

セネカ Seneca, 104-40 哲學者。

10 心の置處

伊藤一刀齋景久といへば、一刀流の開祖であるから、斯道の人でなくつても、大方は知つてゐると思ふ。全國を武者修行して歩いて、名ある人と技を闘はすこと前後三十三回、唯の一度も敗を取つた事がないといふ劍道の達人である。或時、遍歴の途すがら、一刀齋は上總の國にやつて來た。すると、そこに劍槍に巧みな神子上典膳といふ士がゐた。一刀齋が來たといふので、早速試合を申込んで來た。しかし立合つて見ると、典膳はもとよりその相手ではなかつた。そこですぐに一刀齋の弟子となつた。是が後に一刀流を大成して世に弘めた小野二郎右衛門忠明の前身である。

矛盾したやうな語の中にうちこんだ不動の眞理。

一刀齋 一刀流の祖。伊豆の人。

神子上典膳 徳川家康の家臣。寛永五年(二二八八)歿。

忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に従つて全國を武者修行して歩いた時分の話である。一日、典膳は師匠の極意を訊ねた。すると一刀齋は、

「極意」
「油斷」

「別に極意といふ程のものはない。たゞ油斷をしないのが第一だ。」といつた。そして稽古をしてくれるといふことは殆どなかつたが、坐つて居る時でも、歩いてをる時でも、典膳に少しの油斷でもあると、容赦なく「ばかり〜」と撲りつけた。或時、典膳が飯を食つてゐると、いつものやうに「ばかり」と来た。しかし典膳はもう大分修練が積んでゐるから「来たな」と思ふや否や、びたつと箸で受止めてしまつた。
「大分修業が出来て来たな、そのくらゐ油斷しないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」一刀齋は微笑しながら褒めた。

此の時ばかりは典膳も實に嬉しかつた。いつも撲られ通して、痛い目ばかり見せられてゐたのに、始めて師匠から褒められたのだから、彼は本當にほつとした。

「お蔭を持ちまして……」彼は恭しく師匠の前に頭を下げた。すると忽ち「ばかり」とやつゝけられた。

「また油斷を始めたか……」

「また油斷を始めたか」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を取れば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を取れば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。」

るなり。(中略)何處にも置かねば、我が身に一ぱいに行渡りて、全體に延び廣がりてある程に、手のいる時は手の用を叶へ、足のいる時は足の用を叶へ、目のいる時は目の用を叶へ、そのいる所々に行渡りてある程に、そのいる所々の用を叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くるなり。思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、心をば總身に捨置き、所々に止めずして、その所々にあつて用を外さず叶ふべし。心を一所に置けば偏に落つると云ふなり。偏とは一方に片付きたる事をいふなり。(中略)たゞ一所に止めぬ工夫、これ皆修行なり。心は何處にも止めぬが眼なり。肝要なり。どつこにも置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりた

「心をば總身に捨置き、所々に止めずして、その所々にあつて用を外さず叶ふべし」

「眼」
「肝要」

る時も、心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば十方にあるぞ。」

是は澤庵禪師が、禪劍一如の妙趣を柳生但馬守宗矩に垂示した不動智神妙錄の中から抄出したものである。

油斷といふのは、心のうつろになることではない。心が一方にとられることをいふのだ。兎角、人は刀を手にすると、刀に心を奪はれる。學問をすると、學問に心を奪はれる。褒められると、褒められたことといふ氣になる。それが油斷である。

「油斷するな。」

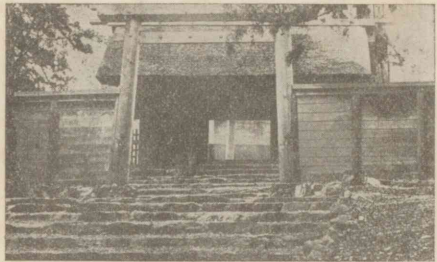
「心をどこにもおくな。」

まるであべこべの言ひ方だ。(山本有三の文による)

澤庵禪師 禪僧。正保二年(一三〇五)歿、年七十三。
「禪劍一如の妙趣」
柳生但馬守宗矩 神陰流の劍客。徳川家光の劍術師範。正保三年(一三〇六)歿、年七十六。

山本有三 本名勇造。明治二十年生。早稻田大學講師。

二 伊勢參宮



俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しき、殊に内宮の畏さは言語につくせません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口をすゝいで、それから頭上の木の枝を透して空を仰ぎ、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並んでゐる間をたどつて暫く進むと、やがて

着眼點 大御神鎮ります國。

山田 三重縣宇治山田市。
外宮 豐受大神宮。
内宮 皇大神宮。

五十鈴川―いすゞがは

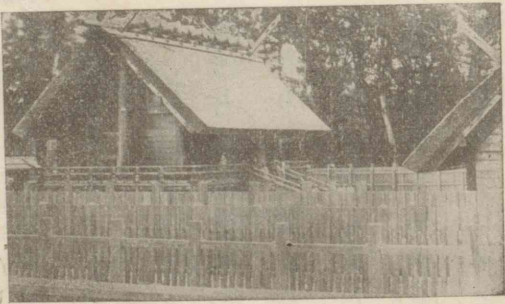
「水底の小鮎の數を讀みつゝ」

挿繪 内宮御正面。

緑青色―ろくしやういろ

木立の奥、塀の彼方に、千木、堅魚木の金色が拜まれます。更に

進んで塀の内に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られ、その奥に疎らに立つた神杉に護られて、御白石のぎつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聴入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、敬虔な姿を思ひ浮かべました。



千木―ちぎ
堅魚木―かつをぎ

挿繪 外宮御側面。

拍手―かしはで

高聲―かうじやう

西行法師 もと佐藤義清と
いつた。有名なる歌僧。
建久元年(一八五〇)歿、
年七十三。

直き清き強き心をあらはして

すくく立てりたふと神杉

大廟は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に表はしたもののやうに思はれます。

私どもは内宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つて、押載いて懐にし、御手洗川に口すゝいで、をりしも聞ゆる笙箏の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、かへりみく宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山、朝熊山に走らせました。

大廟—タイペリ。

御手洗川—みたらしがは

雅樂—ガガク

宇治橋—五十鈴川にかけた橋。長さ五十八間。

朝熊山—三重縣度會郡に屬する。海拔五五〇米。

御社のうしろの御門をろがみて

ひとかけの苔いたゞき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に揺られながら、私はこの神境が大神の大御心になつた謂れを考へました。

大神宮儀式帳に、

『度會の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎮ります國と悦び給ひて、大宮定めまつりき。』

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなきを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしきを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永

神路山—かむぢやま。内宮の神苑を繞る鬱蒼たる山林。
御裳濯川—みもすそがは。五十鈴川をいふ。謂れ—いはれ

大神宮儀式帳—二卷。伊勢の内・外宮から朝廷に奉つた注進書。

久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の積極的・光明的發展を見そなはすに都合のよい、氣の落着く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり／＼車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中にいつか朝熊山の麓に着きました。(五十嵐力の文による)

秋のそら尾の上の杉をはなれけり (榎本其角)

風ふかでをり／＼落つる杉の實のおとも寂しき

谷の下水 (中島廣足)

消極的煩累—セウキョク
テキハナルキ

皇御孫—すめみま

饒舌—ゼウゼツ

五十嵐力 明治七年生。
文學博士。早稻田大學教授。

榎本其角 俳人。蕉門十哲
中の第一人者。寛永四年
(二二六七)歿、年四十七。

中島廣足 國學者。文政四
年(二四八一)歿、年六十
二。

二三 海濱の草

大阪から中國邊へかけての新田には、中世まで白帆の走つてゐたところが多い。以前の大小の島々は、今は塘によつてつながれて陸地となり、その陰を汽車が往來してゐる。或は又吹きまくる風に打ちよせられた砂や小石が、次第に積上げられて、一帯の砂濱を發達させた處もある。所謂長汀曲浦の風光の如きも、追々に改らざるを得なくなつた。

海濱の草木はこれがために非常な影響を受けた。今日空漠たる荒濱に生残つてゐる草花などを見ると、僅かに生を全うして還つて來た勇士を見るやうな思がする。日向國の南の海岸を行くと、岩の陰に隠れて、色々の南國らしい植物

着眼點 海濱の美しさを保存させる望。

塘—つつみ

「荒濱に生残つてゐる草花」

が生存してゐるが、その間を縫うて繁茂してゐる葵葉の牽牛花などは、恐らくは、我々がまだこの花を栽ゑて賞美しなかつた時代から、既にこの附近の天然を占據してゐたのであらう、例へば熊襲隼人の如くに。

濱に這ふ植物としては、葉の表が平らで、滑りがよく、枝に力があつて、よく花を支へるものでなければならぬ。例へば蔓荊の如きがそれである。此の花は花の香が強烈に過ぎ、木の形も荒くれてゐるために、僅かに浦人がその實を採つて枕に入れる位のもので、通例は顧みる者もないが、日本の中部以南の海岸の風景には、松を除けば、この物が最も多く見られるのである。自分が此の花を始めて知つたのは、三十年前、三州の伊良湖岬であつた。廣々と東南の大洋に面し

伊良湖岬 愛知縣、渥美半島の南端。

た砂濱に立つて、一人薄暮の幽寂に冥想を恣にしてゐると、何處ともなく微風に送られて、僅かに香氣を送つて來るものがある。それが蔓荊であつた。土地ではこれを「はまばふ」と呼んでゐた。濱に匍ひ伸びて、時としては、一丈にも餘り、小高い處から見下すと、繪を見るやうな優美な趣を見せてゐる。花の色は淡い紫で、青空に翳せば殆ど消えんばかりの風情がある。この優しい風情に心を惹かれて、私は今でも處々の海濱で立止まつては、じつとこの花に見入るのである。砂や小石の吹寄せられて擴がつて行く濱邊の浪打際の風光は、未來永劫、この植物によつて支配せられることであらう。

南部日本の「はまばふ」に對して、北の濱邊には「はまなす」の花がある。花の艶麗な點では遙かに蔓荊に優れてゐる。支那

「薄暮の幽寂」

「未來永劫、この植物によつて支配せられる」

永劫—エイゴフ。

ては玫瑰は苑中の物であるらしいが、我が國では未だに野生の植物として繁茂してゐるだけのやうである。海岸を走る汽車の窓から見ると、この花は日本海の方面では鉢崎、鯨波のあたりから、次第に旅人の目を留めしめる。そして鼠ヶ關・三瀬の邊からはいよいよ多くなり、果もなく北へ北へと續いてゐる。太平洋岸でも、茨城縣を過ぎて福島縣の濱邊に達すると、急にこの花の群が多くなる。

全體に、この木の多くある處は、里や林を稍離れた、寂寞たる砂原である。風に吹撓められた高山の偃松帶の如く、人の足も立たないやうに密生してゐる。枝は無意味な茨であり、隨つて折角鮮明な紅の花をつけても、傍の綠と相映ずるといふやうな風情はないが、その代り、渺茫たる海の色や、照り

鉢崎 新潟縣中頸城郡。
鯨波 同縣刈羽郡。鉢崎と
共に直江津と柏崎の中間
鼠ヶ關・三瀬 山形縣西田川
郡。共に鶴岡市の南方。

紅くきれなる。

つける日の光が際限もなくその幽艶の美を助けてゐるやうである。八重の薄桃色の薔薇にばかり馴れた目には、この古雅な紅色の單瓣が何よりも懐かしく感ぜられる。夏の北海の靜かな眞晝、この木の傍に佇んで、沖にたなびく白い長い雲を見てゐる氣持は、日本民族の心の中にのみ残されてゐる情致であらう。

島こそ小さいが、日本の自然は、色彩が豊かで、到る處に多くの珍異を見ることが出来る。心なき人の手に荒されて、風情ある海濱も次第に趣を失うて行かうとしてはゐるが、まだその美しさを保存させる望は十分にある。力めて旅行を容易ならしめて、若い眞率な旅人をして、今少し楽しんで自然を視るやうにさせたい。

（柳田國男の文による）

八重やへ

「日本民族の心の中にのみ残されてゐる情致」

「島こそ小さいが」

「楽しんで自然を視る」

柳田國男 文學者。明治八年姫路市に生る。東京帝國大學政治科出身。

一三 明治天皇の御遺物を拜す

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨、仰せ出されましたので、定時に参内致しました處が、十一時すぎ權殿参拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私どもは此の度、先帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで私どもは長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋し其の瞬間は、何人といへども一種の靈感に打たれないものは無かつたのでございませう。其の權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て之に充てさせられ

着眼點 感激の響。

先月十七日 大正二年一月十七日。

「權殿」

詣つて—まゐつて

充て—あて

たのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には永くこゝに在らせられて、徳教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられるなど、宏謨雄圖—に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが参内の節、休息を許される御部屋の方が却つて遙かに御立派である。而も餘り廣くない二間續きの御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も、實に御質素

「御學問所」

御修め—おをさめ

膺懲—ヨウチヨウ

宏謨—クワウボ

雄圖—ユウト

「餘り廣くない二間續きの御部屋」

なもので、絨毯の如きは當初敷かれた儘のもの故、後には色も大分褪めて参りましたので、侍臣から御取換を屢願ひ出でましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございませう。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に御据ゑになつてございませう。此の御構造を拜観すると同時に、夏分は嘸御暑い事ではいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたのでございませう。これにつけても、

年々におもひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

當初一タウシヨ

「三方壁で夏は暑さうな御部屋」

年々への御製 水に對して「汲」といふ語を使はれたので、山地や海邊に避暑することを「山水を汲みて遊ぶ」と仰せられたもの。

の御製を思ひおこして、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、此の御部屋にはストーブの御設備がございませうけれども、三十七年の冬以來、御用ひがない。ひそかに承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございませうましたが、先帝が出御遊ばすや否や、火を消せと仰せられる。侍従は何故か分りませんが、唯仰のままに火を消しました。さて其の後と申すものは、如何なる嚴寒にも一切ストーブを御使用遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心を伺ひ奉る譯には参りませんが、侍従方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共に遊ばさうとの大御心に出でさせられた次第であらう

ストーブ Stove.

皇軍一クワツゲン

と申すことでございます。それ以來は、小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜観するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな

すきま多かるしづがふせやを

でございます。

此の御部屋の拜観が終つて、更に別室の拜観を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部、其の儘に据置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御

斯民—シミン

桐火桶の御製 桐火桶かきなでながら、すきまおほかるしづが伏屋を思ふかな、といふ所を倒装法を用ひられたのである。賤が伏屋では、隙間風がさぞ寒からうにと、思ひやり給ふ御心で、「桐火桶かきなでながら」が實際にさうであらせられたといふことは、何とも恐れ多い次第である。

今上天皇陛下—大正天皇。

Handwritten mark at the top of the page.



テーブルで、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を

遺物も、昨年七月十三日即ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には數振の御劔が置かれ、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近することなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜観する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張りにした

御劔—ギョケン

挿繪 御常用の御机。

「羅紗を鏡張りにしたテーブル」

召上つて入らせられた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸掛けの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聴取あらせられた折、煙草が墜ちて此の焼痕がついたのだと申す事でございます。さて此の焼痕のあるテーブルの羅紗を御取換申し上げようと、幾度か願ひ出でましたけれども、斷じて御許が無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはならないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に御使ひふるしになり、墨も亦同様で、

言上—ゴンジヤウ

御聴取—ゴチャウシユ

「竹製の硯箱、禿びた筆、磨りへらされた墨、普通のインキ」

一寸位に磨りへらされた品でございます。鉄も同じく普通市場にある品で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは一時青山御所に御出で遊ばされた頃から、久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れる様になりました。そこで御取換を願ひ出ましたが、なに、宜しい」とて、御許が無い。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。併し

「獅子の毛皮」

青山御所 東京市赤坂區。赤坂離宮と同じ廓内にある。

適當の皮が無い事を言上致しました處、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申す事で、侍従が、「此の邊が犬の皮です。」と説明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうの物が澤山積重ねてございましたから、「何に遊ばす物か。」と、侍従に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられたのであるとの事でございます。

大臣方より上奏、御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を

「ホワイトシャツの空箱」

ホワイトマン White Shirt

「紙袋……御詠草……皇室豫算御親裁の有様」

上る……たてまつる

隨時……ズキジ

御歌所 宮内大臣の管理の下に、御製、御歌及び御歌會に關する事務を掌る所

反故……ほうご。ほご。

費目……ヒモク

冗費……ジヨウヒ

萬乗……バンジヨウ

御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのでございませ。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

一天萬乗の大君におはしましなから、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかな

る思召で入らせられませうか。皆是れ、節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

御次の間には、造花や彫刻や種々な御品が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奨励の爲に御持歸り、又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられませんが、それ故に造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪め果てて、殆ど裝飾の用をしないものまで、其の儘になつてございます。其の他、美術工藝品の御買上げも、皆御奨励の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていら



挿繪 御愛玩の御遺物。
銅製二宮金次郎像。時々表御座所に御飾り遊ばされたもの。

「節すべきを節して有用に用ひられんとする大御心」

せられます。御製に、

千萬の民と共にまたのしむに

ます樂はあらじとぞおもふ

とございますが、實に此のやうな御樂を求めさせられる爲に、先帝には、長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に、非常の御苦勞を御掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民の業にいそしむ世の中を

千萬の御製 樂は多くあるが、多くの民とともに樂しむ、その樂に勝る樂は此の世の中にはあるまいと思ふ、との御意。

國民の御製 我が國民が國家のために、各々その職務に勵んでゐる。それを見る樂はまたと得られ

見るにまされる樂はなし

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらん限りを盡くし、以て我が日の本のかための爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に御こたへ申す様に誓ふ次第でございます。(笠井信一の文による)

明治天皇御製

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをあの心ともが
な
高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりをぞみ
る
宮のうちもふくかぜさむくなりけり山べはいまや時雨
ふるらむ

ない至上のものだ、との御意。

笠井信一 前岩手縣知事、貴族院議員。昭和四年歿、年六十五。

一四 櫻井驛

(攝津國櫻井の城主櫻井兵衛尉康光が庭前中央古松一株、下手は一面の庭樹を植込み、其の後に母屋の見ゆる心。上手も木振面白き庭樹夏草の花壇などあり、處々に菊水の紋打ちし幕を張る。

正面は天王山を近く望み、寶積寺の三重の塔は、その山腹に塔頂を露はす。遠く淀川船の船歌聞ゆ。正成は正忠・正遠及び櫻井康光夫妻と共に由で來る。正成・正忠・正遠の三人は武裝す)

正成 (正忠に) 伴やお久がまるつたら、直ちに發足致しませう。一同に支度をさせていたゞきたい。

正忠 承知致しました。

(向うより武士一人かけ來る)

武士 奥方と和子様とが御出でになりました。

着眼點 正行の心。

參考

時 延元元年(一九九六)五月

處 攝津國櫻井驛。

人 楠木判官正成 四十三歳

庄五郎正行 十二歳

備前守正忠 (一族)

惠美太郎正遠(同)

櫻井兵衛康光 四十餘歳

お久の方 (正成の妻)

水無瀬 (康光の妻)

天王山 京都府乙訓郡大山崎村にある小山。

寶積寺 ハウシヤタジ。天王山腹にある眞言宗の寺。

和子一わこ

セツウシクニ
エツウシクニ
セカシ
ホツソクイ
レタク
レヨウカ
オウカガ
ワユサマ

マンナイ
トモなれば
カツぐ
ナブる
フサイレ
ヤツ
コフウフ
アツク
オセリ
アスカ
アイサツ

正成 お、これへ案内してくれ。
武士 はつ。(向うへ去る)

(向うよりお久の方と庄五郎とが武士に伴なはれて出づ。侍女二人つき添ふ。武士たちは鎧櫃を昇ぎて出づ)

庄五郎 (正成にすがりつきて) 父上、とうとう参りました。

正成 (庄五郎の頭を撫でつ) うむ、よう来たな。(櫻井夫妻に) この様な遠慮のない奴でござります。庄五郎とお久の方に櫻井どの御夫婦ぢや。今度は大勢が厚い御世話に預つた。

(お久の方と庄五郎とは夫妻に挨拶する)

お久の方 それは忝い事でござります。荒くれ者ばかりで、さぞ御迷惑でござりましたらう。

康光 何の手前どもこそ。都にては判官殿に何かと御世話

鎧櫃—よろひびつ

判官 ハウグワン。檢非違使の尉。元弘三年(一九九三)に正成は檢非違使尉となつた。

カタゲ
ゴメイワ
ハウグワン
シバライ
ハイレカク
オカ
オソレ
オムカ
アリカタ
コサ
コサ

に預つて居ります。

水無 何にしても、こゝは庭先、どうぞあれへお通り下さりませ。

正成 いや、兩人には申し聞けたいことがござります。暫く

こゝを拜借しませう。(武士に) 供のものは、御臺所でもお

借り申して休息させるがよい。

水無 いえ、わたくしが御案内申し上げます。

お久 それでは却つて恐れ入ります。

水無 (供の者に) さあ、かうお出でなさりませ。(康光夫妻を先

に、召仕たち下手に入る。武士は一禮して向うへ去る。行々子鳴く)

お久 此の度はわざ／＼お迎をいたゞきまして、有り難う

存じました。

「行々子鳴く」

庄五(父の顔をじつと見てでは、父上はもう死を決しておいでになるのでござりますか。尋ねかたは愚か過ぎるぞ。荷正成(や、聲を勵まして)その尋ねかたは愚か過ぎるぞ。荷も武士の家に生れたものは、如何なる時、如何なる場合でも、討死の覺悟なくして戰場に臨むべきではない。わしは赤阪や千劍破に城を築いた時でも、この春の洛中の戦でも、きつと討死の覺悟は定めて居た。それで居て、今日まで無事に戰場をかけめぐつて居た。そこが吳子の所謂、死を必ずする時は則ち生きる。ぢや、死生を超越してこそ初めて眞の武士といふ事が出来るのぢや。

お久 それに致しまして、なぜ今度に限り、わざと私どもをお呼寄せになつたのでござりませう。心得のために

ケツ、レ、シ、ウ
コエを、ハ、ゲ
イ、ナ、リ
ワ、カ、ス、ス
オ、カ、ス、ス
イ、カ、ナ、リ
カ、リ、コ
ス、ウ、ウ
カ、カ、カ、カ
シ、ン、を、キ、ス
リ、ヨ、リ、ウ、ウ
イ、ウ、ユ、ン
ス、ナ、リ、ウ

小二郎 正成の第三子。後に正儀と稱した。五人 正成の第四子正秀、第五子正平を併せていふ。

赤阪 大阪府南河内郡赤阪村字水分に城址がある。千劍破 ちはや。同郡東條村金剛山の半腹にあつたこの春、延元元年二月正成京都に大に尊氏を破る。死を必ずする 吳子に、「凡ソ兵戰ノ場ハ屍ヲ止ムルノ地ナリ。死ヲ必スルトキハ則チ生キ、生ヲ幸スルトキハ則チ死ス。」

伺つて置きたいと存じますが。

正成 (笑つて)今もいふ通り、これは齡のせゐらしいぞ。實は今度の戦は、正成の出つくはした何十度の合戦中で、一番難儀なものらしい。そこでわしはひどく迷つたものだ。ゆふべも眞夜中に目が冴えて眠られぬまゝ、吳子を読んだ。そして、あらゆる疑が解けた。兵を用ふるの害は、猶豫最も大なり。三軍の災は狐疑に生ず。ぢや、正成の兵法、今日までは、如何なる時も狐疑せず、敵をして疾風迅雷耳を掩ふの邊なからしめるにあつたが、今度ばかりは狐疑し猶豫した。その爲に庄五郎の身も餘計に案ぜられて、お前たちを呼寄せた事になつたのぢや。今になつて見れば、杞人が天を憂ひたるやうな愚かさで、正成、心ひそかに恥ぢて居る

ケ、ウ、ウ、ウ
オ、コ、ヒ、ビ、ヒ
ナ、ン、キ
マ、ヨ、リ
メ、ガ、サ、エ、ラ
ム、カ、シ、ン
マ、ヤ、マ、リ、カ
ト、ト、シ、ン
コ、ウ、コ
イ、カ、ナ、リ、コ
シ、ユ、ウ、ア、ラ、シ
ミ、カ、イ
オ、カ、シ
ハ、シ、ス

兵を用ふる 吳子に「故ニ曰ク、兵ヲ用フルノ害ハ猶豫最も大ナリ。三軍ノ災ハ狐疑ニ生ズ。」
狐疑—コギ

杞人 列子にある語。杞國ニ人ノ天崩墜シテ身ノ寄スル所無キヲ憂ヘ、寢食ヲ廢スル者有リ。」

のぢや。併しわしも今年は四十三ぢや。今までの戦場で無
事であつただけ、これからは段々危険が大きくなつて行
く譯ぢや。親子三人が手を取合つて長閑に語り合ふ折も
この次にはもう無いかも知れぬ。さうして見れば、お前
ちにわざ／＼来て貰つた事も無益ではなかつたらしい。
いや、庄五郎の學問識見のほどを知つただけでも、わしの
心の曇は去つて、狐疑もなく、猶豫もなく、天空海濶の心を
もつて兵戦の場ばに赴く事が出来る。これも云はばお前
ちの賜物だ。正成禮をいふ。

お久 そのお喜びを伺つて、私ども、どのやうに嬉しいか
分りません。今度は今度とは、どの合戦の時でも、お身の上
を危みながらお見立て申して居りましたが、今度ばかり

天空海濶—テンクウカイ
クワツ

レンガフ
オホレイレ
セイメイを
スル

ゴホウウ
マクウ
ジトク

は安心して御見送り申す事が出来ませう。有り難うござり
ます。若し神佛の思召に適ひます事ならば、出来ませうだ
けは御身命をお厭いとひ遊ばして……思はず涙ぐむ

正成 よくいうてくれた。わしも益もなく生命を棄てよう
とは思はぬ。生きてさへ居れば、まだお上に御奉公の出来
る身ぢや。併し今度の戦は、九死に一生を求めるとぢや。萬
に一つの手違ひがあつても討死をせねばなるまい。お前
の兄上、わしの弟たちも、枕まくらを並べて討死をせねばなるま
い。が、喜んでくれ。あの人たちは、喜んでわしと一緒に死ぬ
覺悟をもつて居てくれるのぢや。この正成は生れ落ちて、
一つ自得した事とてもないが、たゞ士卒と共に楽しみも
し、苦しみもする事を知つて居る。そしてそれはこの三略

お上 後醍醐天皇。

兄上 備前守正忠。

一五 維新の大精神

五箇條の御誓文は、實にこれ維新大改革の宣言書である。日本帝國の新時代に於ける第一聲である。過去に於ける三千年の歴史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定したる帝國不磨の寶典である。其の起草者の何人であるかを吟味する必要は毫もない。何となれば、これは一人一箇の意見に成つたものではなく、實に時代の一大志望、舉國の一大渴望を、明治天皇の御名もて、神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものであるからだ。

抑、五箇條の御誓文は、維新の詔書と同時に成つたもので、實に明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて

着眼點 時代の一大志望、舉國の一大渴望。

國是—コクゼ

渴望—カクカウ

紫宸殿 京都皇居の正殿。朝廷の儀式を行はせ給ふ所。

祖宗の神靈に誓ひ、之を中外に宣し給うたものである。

一、廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設し給うた根元である。而して此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。

これは舉國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對する天職を遂行することを意味したものである。

一、官武一途、庶民に至るまで、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。

此の一條中の主眼は、其志を遂げの點にある。其の志を遂ぐることは、國民の志望を遺憾なく發揮せしむることを意

諮る—はかる

經綸—ケイリン

進捗—シンチヨク

味する。それたゞ其の志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らず。

一、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

これが維新大改革の中樞點である。長き歴史ある國民は、動もすれば其の歴史に拘り囚れて、其の歴史の最も不必要の部分、最も有害の部分、即ち過去の糟粕とか、塵垢とか云ふ部分に執着するものである。故に建國の大精神に顧みて之を一洗する必要を生ずる。如何なる家に於ても、一年に一回、乃至兩回の大掃除は必須である。況や國に於てをや。復況や其の國數百年鎖國の状態に停滯したるに於てをや。茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て

陋習—ロウシフ。

糟粕—サウハク

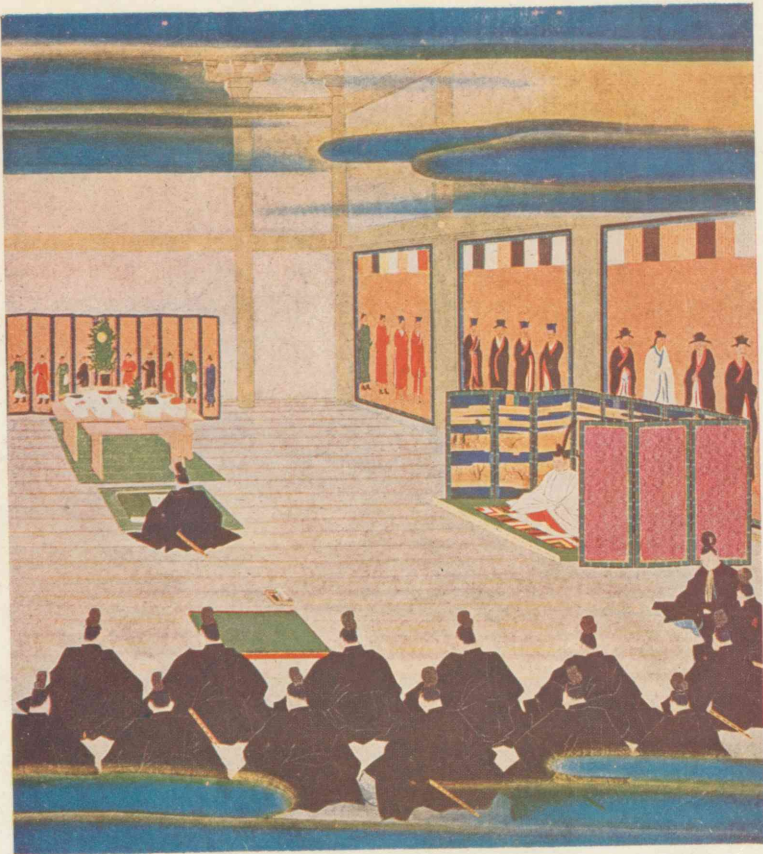
塵垢—チンコウ

執着—シフチャク

「建國の大精神」

舊例故慣—キウレイコク
ワシ

株守—シユシユ



(寫 藤 南 菫)

文誓御の條箇五
(畫壁館畫繪宮神治明)

公道と爲す所を、正視濶歩すべきを示し給うたもの。

一、知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

讀んで字の如し。殊更吾人の説明を要しない。

我國未曾有の變革を爲さんとし、朕躬を以て、衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め、萬民保全の道を立てんとす。衆亦此旨趣に基き、協心努力せよ。

如何にもあり難き思召である。此の五箇條の御誓文は、實に帝國の向ふ所、國民の趨く所を指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案内標である。吾人が維新の大精神に立返れと云ふのは、とりも直さず此の五箇條の御誓文に立返れと云ふのである。（徳富蘇峰の文による）

正視濶歩—セイシクワツ
ボ

皇基—クワウキ

未曾有—ミゾウ

協心—ケフシン

「維新の大精神に立返れ」

徳富蘇峰 名は猪一郎。思想家。貴族院議員。

一六 鸚鵡

「戦闘後、未だに東郷大將その他の方々に御目にあたら
ず候へども、皆々様御無事なりし事と信じ居り申候。この
度の大勝利最早とくに御承知の事と存候。全國の喜びさ
こそと察し候。拙者儀はこの度は別して閑にて何の御用
もなく、たゞこの空前の大海戦の光景と大勝利を拜見致
候のみにて、生來この位愉快を覚え候事は無之、御推察可
被下候。戦況は新聞にて御承知可被成、拙者は語らざるこ
と例の如し。たゞ二十九日夕刻、磐手と八雲との兩艦にて
打沈めたる敵艦の乗組員を、時間の餘裕有りたるため、三
百三十餘名まで海中より救ひ上げやり候事は、母上様の

「着眼點」 「書簡に溢れ
る孝心と慈愛。」

東郷大將 元帥海軍大將東
郷平八郎。

拙者 海軍大將島村速雄。

「拙者は語らざること例
の如し」

磐手・八雲 當時第二戦隊
に屬した巡洋艦。

「母上様の御喜び被成候
事」

御喜び被成候事と存候間、これだけは御話し上げ可被下
候。今一つは川島磐手艦長の飼養せられ居候鸚鵡一羽、平
生拙者公室におき、閑暇の節の好伴侶に有之候處、戦闘の
始る前、艦底に運び、保護いたしおき、戦闘終るやまた運び
上げ候處、何のことか分る筈も無之、うろ／＼いたしなが
ら平日覺え候馬鹿々々、お早う、おくれの三語を發し、拙者
も覺えず失笑いたし候。これは初太郎のお伽噺までに書
認め申候。戦闘後も、そちこち敗敵を搜し候ため引續き巡
航致居候へども、今夜か明朝は一寸郵便を差出し得る事
と存候間、面倒ながら一書斯くの如く、母上様に前書宜敷
申上可被下候。」
この書面は島村司令官が五月三十一日、夫人に宛てて書

川島磐手艦長 海軍大將川
島令次郎。

失笑—シッセリ。

かれたるもので、その母堂に對する孝心と令息に對する慈愛の如きは、讀者をして思はず眼頭を熱うせしむるではな
いか。

さてこの鸚鵡といふのは、川島磐手艦長が軍中の慰藉にもなれかしと、知人より贈られたもので、艦長の親友となり島村司令官からも、またとなきものと愛あがられて居た。この鸚鵡は特に人語を操ることが巧みで、司令官や艦長が果物でも食べてゐるのを見ると、眼をくりくりさせながら、「おくれ！おくれ！」と、幾度でも繰返して、曲つた嘴をもごとごとさせ、それでも希望を達し得ないと、羽毛を逆立て「馬鹿！」とやり、「お竹さん馬鹿！」と罵り、當代無二の謀將や名艦長を下女扱ひにして平然たるのみか、結局果物の半分をうまくとり

「思はず眼頭を熱うせしむる」

「鸚鵡」

無二一ムニ

あげるといふ愛嬌者であつたから、海戦開始に先だち、川島

艦長は従僕に、

「彼奴に怪我させては可哀さうだから、水線下の場所に移動して置け。」

と命じた。そのうちに砲戦が始ると間もなく、一發の巨弾が艦長公室の右舷に命中爆發し、更に他の一弾は以前に鸚鵡を置いてあつた部分を貫通して、その下にあつた萬年青の鉢なども微塵に碎けた程だつたから、鸚鵡が居たなら悲惨な最期を遂げたであらう。晝戦が了ると間もなく、艦長公室に降り來つた司令官と艦長とは、従僕に命じて早速鸚鵡を持ち來らせた。處が固より彼は何事も知らない。羽毛を逆立て、司令官や艦長を見るより早く、「馬鹿！馬鹿！」と疊みかけ

愛嬌者一アイケウモノ

「萬年青」

晝戦一五月二十七日（第一合戦）

て罵聲を浴びせた。滅多に笑はない司令官も艦長を見返り、さも心よげに大笑した。

勇將よりかくまで寵愛を辱うしたこの鳥は、凱旋後、川島艦長より、當時高輪御殿にあらせられた常宮、周宮、兩内親王殿下に献上し、永らく御愛撫の光榮に浴したが、その天壽を完うした後も剝製と遊ばされ、現に竹田宮御殿に御保存あらせられると承る。また敵弾のために鉢を碎かれ、牛蒡抜きにせられて投げだされた萬年青も、その後名の通り青々と復活し、これも亦現に川島家に珍藏せられてある。恐らくこの正月も同家の床を飾り、無言の裡に所有主の戦功を物語つてゐるであらう。(小笠原長生の文による)

「滅多に笑はない司令官」

常宮 昌子内親王。明治天皇第六皇女。竹田宮大妃殿下。
周宮 房子内親王。明治天皇第七皇女。北白川宮大妃殿下。
竹田宮御殿 東京市芝區高輪南町。
牛蒡抜き じょうぼうぬき

この正月 昭和五年。

小笠原長生 海軍中將、子爵。

一七 盲坑夫

花の都フィレンツェの南方、聖ジョバンニの驛で汽車から下りると、アペナインの連山が巨濤の如く起伏してゐる。その間を一筋の道が西に向つて走つてゐる。山の裾には低い葡萄の棚が一面に涯りなくうち續いてゐる。藁づとに入つた首の小さい壘に詰められて、キャンチといふ名稱で全世界へ出て行く葡萄酒は、この地方で生産されるのである。こゝから西の山奥に入ること三里ばかりの處に、幾本かの煙筒が黒い煙を谷間から吐いてゐる。それはカステルノーポの炭坑である。

盲坑夫 ベツカストリーニはこの炭坑の坑夫の納屋で生

増眼點 「紙上に打出された一行の文字」(第一二八頁五行)参照。

フィレンツェ Firenze. イタリア中部の都市。

聖ジョバンニ St. Giovanni.

アペナイン Appennine. イタリア中部の山脈。

キャンチ Chianti. 葡萄酒の一種。

カステルノーポ Castelnuovo.

ベツカストリーニ Baccastri. Natate Beccastri.

れ、その納屋で育つた。そして彼自身も坑夫であつた。彼は無學文盲の一炭坑夫として一生をこの暗黒界の中に終へる身であつた。然るに一朝、全歐に戦雲が飛散したので、彼も祖



國のために戦場の勇士となつた。そして第一線での奮戦で全く兩眼の明を失し、一方の耳は聾し、右手には拇指、左手には二指を殘存してゐるのみの身と

なつた。惨ましい癡兵となり果てた彼は、今ローマ市の癡兵隊長として、白熱的な情熱の詩人として、伊國民に敬慕せられてゐる。

彼がタイプライターに向つて枯枝の如き右手の拇指で

文盲—モンモウ

挿繪 盲坑夫ベッカストリ

ローマ Rome. イタリアの首府。

「癡」と「廢」との區別。

タイプライター
Typewriter.

原稿を作る時、盲坑夫詩人の面影は一段と神々しい。今イタリアの中等學校の國語科補習讀本として廣く行はれてゐる「思ひ出の記」といふ書物は、彼がタイプライターの力を借りて綴つたもので、言々句々、沸きかへる青春の血汐の高鳴りであり、莊重な詩歌である。そして又尊い彼の自叙傳でもある。

莊重—サウチヨウ

彼は戦争によつて惨ましい肉體の破壊を被つたと同時に、偉大なる精神の建設を成就した。戦争のために兩眼の明を失つた彼は、戦争によつて心の眼を見開いた。

「偉大なる精神の建設」

私は七八年前から彼と親しく交つてゐる。ローマに遊ぶ毎に彼を訪づれないことはない。彼が今日まで辿つて來た徑路は、涙と血と情熱と努力とで書上げられた一つの莊嚴

徑路 經路に同じ。

な人生の詩である。

一九一七年三月三日の朝、南歐の空には春立つことも早く、空は底の底まで長閑に澄渡つて、鶉の毛ほどの雲の影も見えない。廣いアルドブランデー邸の庭にはオレンヂの花の強い香が立罩めてゐる。

その朝、まだ外は春の夜の甘い眠の薄絹に包まれて静まり返つてゐる時、ベッカストリーニの室の戸をけたましく叩く人がある。

「ナターレ君、起きろ！ 一大事が持上つたぞ！」

正しく大隊長フォリエロの聲である。手さぐりに寢臺を下りたベッカストリーニが、戸を開いて聲する方に擧手の

「莊嚴な人生の詩」

アルドブランデー邸
Villa Aldobrandini.
歐洲大戦中イタリヤ軍の
失明者を收容した所。
オレンヂ Orange. 橙。

敬禮をすると、

「今日君に勳章授與の式がある。畏い事だが、皇太后陛下が親ら君の胸に勳章をつけてやりたいとの仰とかで、急にその式場の準備に取りかゝつた。この癡兵院の總裁も、副總裁も大慌てて出て來られて、今邸内は大騒ぎだ。何しろ足下から鳥が立つやうな話で、皆驚いてしまつたよ。君も早く支度を整へるがよい。」

大隊長の聲は晴やかである。ベッカストリーニの榮譽をわが事のやうに喜ぶ嬉しさの動悸が、その聲の裡にも響いてゐる。今までうつら／＼と見續けてゐた春の曙の夢は覺めても光明を見ず、永劫の闇に生きる外なき盲軍曹の身には、この突然の悦は夢とも現とも分き難かつた。

皇太后 マルゲリータ。
Margherita.

足下—あしもと。

永劫—エイゴフ。

「早く支度をし給へ。」
と、軽く肩を打つた大隊長の手は、彼を夢幻の天國から現實の境に移した。

「皇太子殿下もお出でになるさうだ。服装などにも十分氣をつけ給へ。」

戸の際に、今まで黙々として起立の姿勢で立つてゐた盲軍曹の頭は、次第に垂れた。やがてその足下にこぼれ落ちた涙が床を濡したかと思ふと、彼は不動の姿勢のまま、啜り泣きに泣くのであつた。

「僕も嬉しいぞ！」

堪らなくなつて、大隊長が盲軍曹の手を握りしめた時、枯枝の如く碎かれた彼の手に、大尉の涙がはら／＼と散つた。

皇太子 ウンベルト。
Umberto.

癡兵院では大混雑である。役人が走る、人夫が叫ぶ、軍人が飛ぶ、電話の鈴がひつきりなしに鳴る。大門に入る自動車の轟音、玄關を遠ざかる馬車の軋り。式場の準備は忙しく、誰も彼も右往左往に駆けまどつてゐる。寢耳に水の勳章授與式の時刻が刻々に近づく。

夜は明け放れた。まだ夢心地で、ベッカストリーニは顔も洗ひ服も着けた。始終彼の側にあつて手助けしてゐたのは従卒のピエトロ、バツチスチである。朴訥寡言な田舎者のピエトロは、正直一徹な牛のやうな男で、敏捷機智な才物ではなかつた。ベッカストリーニに服を着せておいて、一寸室の外に出たきり歸つて來ない。式場準備の大騒ぎの颶風の中に捲込まれて、何處かであら／＼と驅廻つてゐるのであら

一徹—イッテツ

う、何時まで待つても歸つて來ない。服を着けたばかりで、寢臺の横の椅子に腰かけてゐた盲軍曹は、氣が氣でない。門から入つて來る車馬の音を聞く毎に、彼の碎けた手はじれつたさうにぶる／＼と顫へてゐる。

時は容赦なく進んで、式場に繰込む人の流は引きも切らない。

「ピエトロ！……ピエトロ！」

彼の聲は、從卒が出て行く時に開放つた戸口から、幾度か廊下に響き渡つた。

その時不意に廊下から澄んだ聲が答へた。

「君、誰を呼ぶのです。何の用ですか。」

「先刻から從卒を呼んでゐますけれど、……どこへ行つて

了つたのだか、……僕にまだ靴を穿かせなければならぬのに……。」

廊下の聲の主人はつか／＼と室の中に入つて來た。

「僕が穿かせて上げませうか。」

「さうですか。では濟みませんが、……どうも恐れ入ります。ためらひながら足をさし伸べた盲軍曹の足下に跪いて、今進み寄つた少年は丁寧^ニに靴を穿かせた。

「これ位でいゝですか。……餘り固くはありませんか。少し緩めませうか。」

「いや結構。どうも有り難う……。」

ベツカストリーニがその少年にお禮を言つてゐる時、廊下の彼方から四五人の靴音が聞えて來た。

「殿下！殿下！何方において御座います。殿下！式場の準備が出来ました。……」
と呼立てる聲に、

「こちらに居るよ。今行く。」

盲軍曹の足下から立上つて、
「さようなら！」と軽く挨拶して
出て行くのは、實にイタリヤ王
國の皇太子殿下であつた。



挿繪 イタリヤ皇太子ウンベルト殿下。

さてはと氣がついて、驚いて起立した盲軍曹は、不動の姿勢で、遠ざかり行く靴音の方に舉手の敬禮をさへげた。
見る影もない不具となつた盲目の坑夫の足下に、一國の皇太子殿下が跪いて靴の紐を結び給ふ光景を想へ。あゝ尊

い詩ではないか、莊嚴な畫ではないか。

間もなく式が始つた。大勢の役人や市民達で、さしもの廣い邸の中庭は立錐の地も餘さない。感激に打たれた盲坑夫の顔は、いつになく蒼ざめてゐる。

式は型の如く進んだ。すべてがたゞ一つの夢としか思はれない盲坑夫には、誰彼の演説も遠い幻の奥の人聲としか聞えなかつた。軍功勳章銀章、陸軍工兵曹長ナターレ、ベッカストリーニ！と誰かが呼立てた聲に驚いて起立すると、幾千の拍手が迅雷の碎けるやうに響いた。

「はい。」

彼はよろ／＼と二三歩進み出た。敬禮をして立つ彼の胸に、皇太后陛下の御手が觸れた。青い綬の軍功勳章の銀章が

「尊い詩、莊嚴な畫」

立錐ーリッスキ。

迅雷ージ。ンライ

綬ージュ

陛下の御手によつてつけられた時、二度目の迅雷が中庭から響きわたつた。

盲坑夫がやを元の席に着かうとする時、鈴のやうな御

聲が彼を呼止めた。

「あなたは目も見えず、両手の指も碎かれた不自由の身で、絶えず新聞や雑誌に見事な作品を發表しておいでなさる。私は



あなたの作品は、役人に命じて一つ残らず集めさせて讀んでゐます。今朝院長に聞くと、あなたは右の手に残つたその一本の指で、タイプライターを打つて、あの立派な作品を書き出されるとか。若し差支へなければ、私の前で、何でもよいか

やをら

挿繪 イタリヤ皇太后マル
ゲリータ陛下。

ら、タイプライターを打つて見せてくれまいか。」

盲坑夫は黙つて立つてゐる。顔の色はますます蒼くなる。唇がふるふる。癡兵院の總裁が彼を勵ますので、やうやくに、

「畏りました。」

と答へた彼は、從卒に命じて、平常使ひ慣れたタイプライターを持つて來させて、陛下の前の卓上に置かせた。

やはらかい春の日は彼の頸を撫でる。皇太后陛下、皇太子殿下、二人の女王殿下を始として、百官が彼の後から覗き込んでゐる。やんごとなき方々の息が身に近く感ぜられる。

今朝まだ曉の夢の覺めない頃から、身にふり掛つた重ね重ねの光榮は、唯一つの夢としか思はれない。夢に夢見る心地で、タイプライターの前に腰掛けてゐる盲坑夫の後から、

「何でもよいから……」

と玉の御聲がかゝると、彼は忽ち電氣に打たれたやうに身震ひしたが、顔は全く蒼白く、手はとめどもなく顫へた。

右の手に残つてゐる拇指が、タイプライターの文字の上を電の如く走つたかと思つたと見ると、紙上に打出された一行の文字は、

「聖恩の渥きに感泣す。」

とのみで、後は續けもえせず、空虚なる兩眼からはら／＼と溢れ出る熱涙を抑へんとして抑へる能はず、タイプライターの上泣伏してしまつた。

暖かい三月の太陽は、この人生の大畫面一杯に薄紅の光を浴びせてゐた。(下位春吉の文による)

「聖恩の渥きに感泣す」

「人生の大畫面一杯に」

下位春吉 東京高等師範學校出身。ローマ大學教授。

一八 茶の間

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集つて、そこにあつたのにも驚く。家中で一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで届きさうに見える。毎年の暮に、郷里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒にゐる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狭い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づつその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狡いと言ひ出すものがあり、もつと頭を平にしてなどと言

着眼點 内と外からの嵐に揺く心。

鴨居—かもゐ。

ふものがあつて、家中のものがみんなで大騒ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戯れから始つたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ／＼には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

「誰だい、この線は。」

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお徳のがある。いっぞや遠く満洲の果てから家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までもそこに残つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとし

「鉛筆で柱の上に記しつけて置いた」

「頭文字だけを羅馬字であらはして置く」

「誰だい、この線は」

住居—すまひ。

てゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めい／＼

一部屋づつ要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狭苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ、末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言ひ暮して來た。それに、二階は明るいやうでも西日が強く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

「この家には飽きちやつた。」

「一人前に近い心持」

要求—エウキウ

と言ひ出すのは三郎だ。

「父さん、僕と三ちゃん二人で行つて探して来るよ。好きな家があつたら、父さんは見においで。」

次郎は次郎でこんな風に引受け顔に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

實に些細なことだから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には何かしら自分でも動かずにもゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。

私は茶の間に集る子供等から離れて、獨りて自分の部屋を歩いて見た。僅かばかりの庭を前にした南向きの障子か

畫作—グ。ワサク

「自分でも動かずにもゐられない心の要求」

「私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた」

「獨りて自分の部屋を歩いて見た」

らは、家中で一番静かな光線が射して來てゐる。東は窓だ。一枚の硝子戸越しに、隣の大屋さんの高い塀と檜の樹とがこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな静かさがある。

丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配された程で、茶の間に集る子供等まで一時沈まり返つてしまつた。

どうかすると、子供等のすることは、病んでゐる私をいらさせた。

「家中で一番静かな光線」

「地下室にでもゐるやうな静かさ」

「父さんを忿^いらせることが、父さんの身體には一番悪いんだぜ。それくらゐのことがお前達に解らないのか。」

それを私が寝ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいて、すごくと障子のかげの方へ隠れて行つたこともある。

「子供でも大きくなつたら。」

私はそればかりを願つて来たやうなものだ。眼には見えなくても降り積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。

私が地下室に譬へて見た自分の部屋の障子へは、町の響が遠く傳はつて来た。私達の住む家は、西側の塀を境に、ある邸つゞきの抜け道に接してゐて、小高い石垣の上を通る人

「言つて見せると」

「すごくと障子のかげの方へ隠れて行つた」

「町の響」

の跽音や、いろ／＼な物賣りの聲がそこにも起つた。何處の

石垣の隅で鳴くとも知れないやうな、ほそ／＼とした地蟲の聲も耳に入る。私は庭に向いた四疊半の縁先へ、鋏を持出して、よく延び易い自分の爪を切つた。

どうかすると、私は子供と一緒になつて遊ぶやうな心も失つてしまひ、自分の狭い四疊半に隠れ、庭の草木を友として、僅かに獨りを慰めようとした。子供は到底母親だけのか、父としての自分は偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか——そんな嘆息が、時には自分を憂鬱にした。その度に氣を取り直して、また私は子供を護らうとする心に歸つて行つた。

安い思ひもなしに、移り行く世相を眺めながら、獨りてじ

「人の跽音」

「地蟲の聲」

「獨りを慰めようとした」

「子供を護らうとする心」

世相—セサウ。

つと子供を養つて来た心地はなかつた。しかし子供はそんな私に頓著してゐなかつたやうに見える。

過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて来たやうな氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとゞめないものはない。髪はめつきり白くなり、坐り胼胝は豆のやうに堅く、腰は腐つてしまひさうに重かつた。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るやうにつくふと見た。

「自分の掌はまだ紅い。」
と獨り思ひ直した。

ある日の午後の好い時を見て、私達は茶の間の外にある

「嵐の中に坐りつゞけて来たやうな」

「坐」と「座」との區別。

「午後の好い時」

縁側に集つた。そこには私の意匠した縁臺が、縁側と同じ高さに三尺ばかりも庭の方へ造り足してあつて、蘭山査子な

山査子—サンザシ

どの植木鉢を片隅の方に置けるだけのゆとりはある。石垣に近い縁側の突當りは、壁によせて末子の小さい風琴も置いてあるところ、その上には時々、の用事なぞを書きつける黒板も掛けてある。そこは私達が古い籐椅子を置き、簡単な腰掛椅子を置いて、互に話を持ち寄り、庭を眺めたりして来た場處だ。毎年夏の夕方には、私達が茶の間のチャブ臺を持出して、よく簡単な食事に集つたのもそこだ。

庭にある遅咲の乙女椿の蕾も漸くふくらんで来た。それが眼につくやうになつて来た。三郎は縁臺のはなに立つて、庭の植木を眺めながら、

「庭」

「次郎ちゃん、こゝの植木はどうなるんだい。」

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黑板の前に立って何かいたづら書きをしてゐた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のゐる方へ行つた。

「そりや、引抜いて持つて行つたつて、構ふもんかーもとからこゝの庭にあつた植木でさへなければ。」

「八つ手も大きく成りやがつたなあ。」

「あれだつて父さんが植ゑたんだよ。」

「知つてるよ。山茶花だつて、薔薇だつて、さうだらう。あの乙女椿だつて、さうだらう。」

氣の早い子供等は、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引越して行くやうな調子に話し合つた。

山茶花—さざんくわ

「今にも引越して行くやうな調子」

「そんなにお前達は無造作に考へてゐるのか。」と私はそこにある籐椅子を引きよせて、話の仲間に入つた。「お父さんぐらゐの年齢になつて御覽、家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに。」

やがて自分等の移つて行く日が來るとしたら、どんな知らない人達がこの家に移り住むことか。そんなことがしきりに思はれた。庭にある山茶花でも、つゝじでも、何度私が植替へて手入れをしたものか知れない。暇さへあれば箒を手にして、自分の友達のやうにそれらの木を見に行つたり、落葉を掃いたりした。過ぐる七年の間のことは、その土にもこゝの石にも種々な痕跡を残してゐた。

「家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに」

「その土にもこゝの石にも種々な痕跡を残してゐた」

る庭へ降りて行つた。

「次郎ちゃん、芍薬の芽が延びてよ。」

末子は庭にゐながら呼んだ。

「蕙の芽も出て来たわ。」

と、また石垣の近くで末子の呼ぶ聲も起つた。

(島崎藤村の文による)

ユウモアの無い一日は極めて寂しい一日である。

言葉は思想である、行ひである、又符牒である。

すべてのものは過ぎ去りつゝある。その中であつて多少なりとも、まことを残すものこそ眞に過ぎ去るものと言ふべきである。

心を起さうと思はば、先づ身を起せ。

(島崎藤村)

島崎藤村 名は春樹。明治五年生。文學者。

一九 マッチ賣の娘

恐ろしく寒い晩でした。雪は降つてゐるし、もう四邊は薄暗くなつて來ました。しかもそれは一年の一番終ひの大晦日の晩でした。この寒い暗い夕闇を、一人の娘が頭には何も被らず、往來を歩いて來ました。家を出た時には上靴を穿いてゐましたが、それも死んだ母親の靴で、大きすぎるために、さつき傍を二臺の馬車が恐ろしく早く通つていつた拍子に、急いで往來を突切らうとして、その靴を無くしてしまつたのです。片方はどこかへ見えなくなり、片方は男の子に泥だらけにされてしまひました。そこでこの娘は跣足になつて歩いて行きました。可愛い

「マッチの火影」

一 哀れなマッチ賣の娘は、寒い夜の街のとある軒下に飢ゑをこゝえた身をかどめる。

夕闇一ゆふやみ

上靴一うはぐつ

「片方はどこかへ……」

小さな足は冷たいので、赤く紫色になつてゐる。娘は古い前掛の中にマッチを幾包も入れて、手にも一包持つてゐました。その日は一日中歩いて、誰も買つてくれる者もなく、誰もお金をくれる者ありませんでした。お腹は空しく、寒くはあるし、娘は震へながらしよぼ／＼歩いてきました。雪はちら／＼娘の金色の髪の上に降りかゝります。どの家の窓からも明るいランプの光が洩れて、往來はどこへ行つても、焼いた鶯鳥の匂が漂つてゐます。それで、その晩がクリスマスマスの晩でもあるやうに娘は思ひました。

丁度二軒の家の間に庇間のやうな隅がありました。娘はそこへ入つてかゞみしました。小さな足を體の下へまげてみましたが、寒さはだん／＼身にしみて來ます。けれども、けふ

「一日中歩いて、誰も買つてくれる者もない」
空／＼すく

「どの家の窓からも明るいランプの光が洩れて」

「庇間／＼あはひ」

「そこへ入つてかゞみしました」

はまだ一包もマッチを賣らないので、此の儘家へ歸る譯にはいきません。このまゝ歸れば、父親にぶたれるばかりです。それに家へ歸つても、寒いのは同じ事です。屋根といつても、ほんの申譯だけで、いくら藁や檻樓を隙間へ詰めてみても、寒い風はびゆう／＼吹込んでくるのですから。

このマッチ賣の娘は、何處に行つても暖かには暮せぬ身の上でした。マッチの束から一本抜いて火をつけたら、せめて指位は暖めることが出來はすまいか。かう思つて、娘はとう／＼マッチの束から一本抜いて、しゆつと火をつけました。すると、きら／＼した明るい火がばつと燃え上つて、娘はそれに小さな手をかざしました。不思議な事には、娘はその火にあたると、眞鍮の金具のついた鐵の大きなストーブに

二 美しい幻影の中に娘は死んでゆく。
「せめて指ぐらゐは暖めることが出來はすまいか」

眞鍮—シンチニウ。

あたつてゐる様な心持がしました。焔は綺麗に暖かさうに燃えました。それから娘は足を暖めようとして伸ばすと、マッチは消えてしまひました。ストーブも消えました。娘の手



に残つたのは一本のマッチの燃えがらでした。

それから又一本に火を点けました。ぱつと光つて燃えると、その壁は紗のやうに中が透いて見えま

した。見れば、そこに一つの部屋があつて、内には用意の出来たテーブルの上に、焼いた鶯鳥がおいしさうに湯氣を立ててゐます。それにもつと好いことは、焼いた鶯鳥が皿から飛

「又一本に火を点けました」

びだして、ナイフやフォークを背中に刺したまゝで、床の上を歩いて來ることです。しかも娘の方へやつて來るのです。すると、その途端にマッチが消えて、後には厚い冷たい壁が見えるばかりでした。

娘はまた一本に火をつけました。今度は立派なクリスマスツの樹が現れました。その樹の綺麗で大きなことは、クリスマス晩に、立派な商人の家の硝子扉の中に見たものよりはずつと立派でした。幾千の明りが緑の枝にちら／＼して、娘は美しい繪を見てゐるやうな心持がしました。するとその時マッチが果敢なく消えました。澤山のクリスマスツの明りはだん／＼高く上つて行つて、空の星になりました。その中

「また一本に火をつけました」

た。

「あゝ、今誰かが死んだのね。」と娘は思ひました。それは、今はもうこの世にゐないおばあさんが、星が飛ぶのは、人の魂が天に昇るのですよ。」と教へてくれたからです。この子を可愛がつたのは、世の中でこのおばあさんたつた一人でした。それから娘はマッチを一本執つて壁に摺りつけました。四邊は一面に明るくなりました。するとその明るい中におばあさんがにこ／＼して、優しい顔をして立つてゐるではありませんか。

「あゝ、おばあさん、どうぞあたしと一緒に連れて行つて下さい。このマッチが消えれば、おばあさんはもう見えなくなるのですもの。」

「おばあさんがにこ／＼して、優しい顔をして立つてゐる」

と、娘は大きな聲を揚げました。

そして娘は急いで残つてゐたマッチの束にすつかり火をつけました。娘はおばあさんをこゝへ引止めておきたかつたのです。

マッチはお日様の光よりも明るく輝きました。おばあさんの姿は今迄に見たことがない位に大きく美しくなりました。そして娘を兩腕に抱きしめて、光の中へ高く上つてゆきました。娘は次第に、寒いのも、おなかの空いたのも、心配も忘れて、とう／＼神様のお傍へつれて行かれました。

寒い曉方が白んで来る頃、この家の隅に、娘は頬を眞紅にして口許には笑を含んだ儘凍えて死んでゐました。新年の朝日はこの小さな死骸を照らしました。娘は手に燃え残り

「娘は急いで残つてゐたマッチの束にすつかり火をつけました」

三 翌朝、死んでゐる娘を見た人々の話。「この娘があれほど美しいものを見たことは、誰も知らない。」

のマッチを持つてみました。これを見た人々は、「この子は暖まらうとしたのだね。」といひましたが、あれ程美しいものを見て、その光の中で、おばあさんと一緒に新年を迎へたことは、誰も知りませんでした。(アンデルゼンお伽噺による)

童話の世界

猿どのの夜寒訪ひゆく兎かな

童話の世界である。猿どのと呼んだのも面白い。又「猿どのの夜寒」と續けたので、猿どのが此の頃の夜寒を淋しがつてござらうと思ひやつた兎さんの心持が出るところに、此の句が生きる。若し「猿どのを兎が訪へる夜寒かな」としたらば、ずつとつまらない句になる。かうした處に蕪村の苦心がある。言葉が藝術的に生かされるといふ妙諦もこゝにあるのである。

(荻原井泉水の文による)

アンデルゼン Andersen.
(1805—1875) デンマークの詩人。お伽噺作家として最も有名である。

荻原井泉水 俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生る。東京帝國大學國文科出身。

二〇 雲萍雑誌抄

ある人時刻を知らん爲にとて、自鳴鐘を求めんとするを、その妻之をとめていひけるは、「明けくれにかくる世話のみにあらず、くるひたる折からにはその隙を費し、自鳴鐘のために、かへりて時を失ふこと多からん。やめ給へ。」といへば、「さあらば雞を飼ふべし。」といふに、その妻又とめて云ひけるは、「時刻は人のうへにあり。汐の満干もこれとおなじかるべし。自鳴鐘・雞を便りとするは、勤めに怠るものゝいたすことなり。」と夫を諫め、つひに雞をも飼はずなりにき。

一休禪師、紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあ

【眉眼註】 第七課「三人の時計」との對照。

雲萍雑誌 四卷。

柳澤洪剛著「見聞漫録」(二十卷)中から採録補訂したもの。

自鳴鐘 ジメイシヨウ。鈴打ちの時計。



かくる (ねちを) かける。

「時刻は人の上にあり」

「勤めに怠るものゝいたすことなり」

一休禪師 禪宗の高僧。京都大徳寺の住。文明十三年(一二四一)歿、年八十八。

れば、「御用心」と書きて與へぬ。しひて他のことをもとむる者あれば、「御用心」といづくも書き給ひ、又上に、只といふ一字をそへて、「只御用心」とか、せ給ふこともありとかや。いとおもしろく、その語すべての事にかよひて、教訓とはなりにけり。予もまたそれにならひて、用心の二字を合はせて、一字に作り書けり。その文に云ふ、

鳥渡見れば忍ぶに類し、鹿忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。

天龍寺の觀道といふ僧これを見て、棄恩入無爲、眞實報恩謝といふ文意に、何となくかよひてをかしといへり。

守邪とは、醫書の樞要にして、人の行ひにていはば、油斷せ

鳥渡 忍
鹿忽 恩
はるか 思

天龍寺 山城國葛野郡嵯峨村に在る禪宗の本山、夢窓國師の創建。
棄恩入無爲 一切の煩惱を斷つて「悟」を開くこと。

「守邪」

ざるなり。よろづの事も、みづからゆるす所よりして、よからぬことは出で來るなり。甚しく寒き時は、風邪にもおかさねぬものなり。寒さのゆるみたる時に、邪氣に感冒するにて知るべし。これはさゝいなることとゆるす時には、や大惡のきざすもと思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが大事の始とこそ思ふべし。古歌に、
かばかりの事は憂世の習ぞと
ゆるす心の果てぞ悲しき。

(柳澤淇園の文による)

心胸には道理に知れない道理がある。
わたしたちは千百の事物に於て、その道理以外の道理を知る。(パスカル)

「邪も氣のゆるむとき入るなり」

柳澤淇園 名は里恭、字は公美。儒者。寶曆八年(二四一八)歿。年五十三。

パスカル Pascal Blais (1623-1662) フランスの幾何學者・哲學者。

二 否の一語

人の此の世に處するや、事の次第によりては、否の一語を言ふの勇なかるべからず。何となれば、誘惑の事及び罪惡の事、その始に當りては、甚だ些少なるが如くなれども、その中に陥るに及んでは、遂にその圈套を脱出する能はざるに至る。故に始より毅然として「否」と言ひて之を拒むべし。「否、我は之を爲す能はず」と言ふべし。然るに、世人を觀るに、能く此の否の一語を言ふの勇氣あるもの少し。

否の一語を言ふ能はざる一種の人あり。他の心に違ふを怖るゝに由るや、他人の心に順ふを欲するに由るや、確かに知り難しと雖も、此の人は、他人に頼まるゝことを辭せず、或

【着眼點】第九課「人生の急所をさめる人」との對照。

圈套—ケンダウ。

「否の一語を言ふの勇氣」

違ふ—たがふ
順ふ—したがふ

は金錢を貸し、手形に裏書し、或は證人に立ち、遂に之が爲に累を受け、其の身、其の家を傾くるに至るなり。人、當然の時に於て、否の一語を言ふは、安全の道なり。蓋し許多の人、否の一語を言ふ能はざるに由りて、其の身、其の家を傾くるに至るなり。

歡樂の事、我を誘引せんとして我を試みる時は、直ちに否といふ決心を有せざる可からず。此の決心は徳行をして益堅固ならしむ。若し始に於て一步を譲り、否といふことを怠らば、自己に信賴するの力、これよりして退き減ずべし。然るに、否の一語を言ふに、始は其の難きを覺え、大いなる勢力を要すれども、久しき後は、自然に勢力増加して容易となる。怠惰惑溺、其の他諸の惡習の襲撃を防がんには、否の一語より

裏書—うらがき

「當然の時」

「自己に信賴するの力」

外は有らず。故に曰く、當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる徳行なりと。(中村正直の文による)

或人文盲なる者を意見して、世の交は他の事はいらす、たゞ堪忍の二字をよく守るべし。と言へば、文盲の人は頭をかたむけ、かんにんとは四字にて侍らずや。と指もて數へ、御許には思し違へなるべし。かんにんと四字にて侍り。と言へば、意見せし人、愚なる人かな。堪忍とはたへしのぶとよみて二字なり。と言ふ。彼の人また頭をかたむけ、たへしのぶならば、また一字ふえたり、五字となり侍るべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり。と言へるに、其の人また、汝が如き愚なる文盲は實に論し難し。人に似て蟲同様なり。己が儘にすべし。と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、惡口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり。と笑ひむたりとぞ。

(雲萍雜志による)

「當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる徳行なり」
中村正直 號は敬宇。文學博士。明治二十四年歿。年六十。

三 近江聖人の幼時

雪ならば幾たび袖を拂はまし

はなの吹雪の滋賀のやま越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、满目蕭條たる湖上の風景、辛崎の松は暮靄朦朧の間に隠れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の雪、今よりこの山路に掛らば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿を求めんかと、獨り旅の少年は前路

「霜雪記」第一七課「茶の間」と對照。

近江聖人 中江藤樹。慶安元年(一三〇八)歿、年四十一。

「雪ならば……凜冽たる風は膚を裂く」

滋賀の山 滋賀縣大津市附近。

蕭條—セウデツ。

「辛崎の松は暮靄朦朧の間に隠れて」

坂本 比叡山の東麓。

を睨んで、暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば、我が故郷。今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しくこゝに留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ。いでこゝ心を取直し、今宵の中にこの小山越えんものを」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどりこゝて行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり、闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂寞と

我が故郷 滋賀縣高島郡小川村。
「家に歸らば疲も厭はじ」

彌増すーい。やます

して、耳に答ふるものとは、閉ぢし氷の下潜る、細谷川の水の音、松の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響など、幽かにもの凄く聞えて、怖ろしとも悲しとも譬へんやうなし。かゝる難處と知りもせば、麓にて一夜を明かししものを、旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこの深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓ゑを感じて、寒さは一入身にしみ渡り、眠るともなく死ぬともなく、前後を知らずなりにけり。

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に

難處ーナンシヨ
深山路ーみやまち。

谷りーきはまり

餓ゑーうゑ。

見て、忽ち足の疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。かの家は我が友の家なりけり、この家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、そゞろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふまゝに根を延ばして、彼方此方に生ひ出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れ

「夜は漸く明けたれども」

衡門―かぶきもん

脩竹 シウチク。長い竹。

築地―ついで。

ば、車井のきしる音さへ寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、この雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈け行きて、後よりその袂を引き、「母様、私が汲ませう。」と、涙ながらに取りすがる。

事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か、藤太郎、どうしてこゝへ。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助を致しに参りました。まづ内にお入り遊ばせ。おつむりに雪が掛ります。」と、孝子の真情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。「叔父様とでも一緒か。」いえ、一人で御座います。母は聲を勵まし、「叔父様

叔父様 祖父吉長をさす。
藤太郎は父が早く歿したから、祖父吉長に養はれた。吉長は大洲侯に仕へた。藤太郎も従つて大洲に居たのである。

が一人和郎をお出しなされたか。「いえ、叔父様には知らせず
に参りました。母は眉を揚げ、怪しからぬ、何故そんな事を。さ
あお話しなさい、和郎が歸つたわけを。いえこゝで聞きませ
う。聞かないうちは、めつたに家へは入れません。颯と吹來る
朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顔
を撲つ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心
根に、そゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を
勵まして、和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父
様に頼む時、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人になら
ないうちは、決して途中で歸るなど、あれほど堅く言ひ聞か
せた事を忘れましたか。この母が難儀を忍ぶのも、たゞ和郎

を立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居
て手助をしてくれたとて、何のそれがうれしからう。一人で
來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び逢ひ
ません。その足で大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力抜けて
雪の上に跪きぬ。母はその失望せる様子を見て、痛はしさ胸
に満ち、かくまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の
一人旅、定めて憂き事も、つらき事も多かりしならん、せめて
一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の
情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなか
に弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落
すと聞くものを、和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と強く

「その足で大洲へお歸り
なさい。」といふなどと
いふ語をつけないとこ
ろに、わざと言葉を勵ま
していつた調子が出る。
かうした例は、「見合は
す顔、互の眼には涙一
杯。」雪の上にはほろ／＼
と落つる涙。「満天の風
雪、路悠々」等いづれも
強い感じを興へる。
大洲 愛媛縣喜多郡、當時
加藤貞泰六萬石の城下。

は叱れど、聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい、解りました。」それなら今から歸りますか。藤太郎は悲しき聲、はい歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸の絞らるゝ思、遂に堪へかねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を呑む。藤太郎は屹として立上れり。母様、この薬は輝の妙薬で、世にも得難き品。これ差上げたいと、わざわざ持つて参りました物。これだけはお取りなされて下さい。」と、新谷にて得し薬を差出す。母は快く、「お、和郎の志、これだけは受けませう。」と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。母は恥かしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけ

新谷にて得し薬 「新谷」は大洲の北、一里半。藤太郎は母が輝に苦しむ由を叔父から聞いて、一方ならず心を痛めた。たまたま新谷にその妙薬のあることを知つて、その持主をたづねると、それは中田長閑齋といふ切支丹宗の信者で、今しも松山より討手が向ひ、四國を落ちようとする危急の際であつたが、藤太郎の孝心に感じて此の薬を分與したのである。

ん、薬を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろ／＼と落つる涙。

雪はなほ霏々たり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く／＼我が家を立出でたり。見送る母、見返る子、満天の風雪、路悠々。(村井弦齋の文による)

翁かねて思ふに、口を發する上にていへば言とし、言の連續する上にていへば語とし、語の模様をなす上にていへば辭とし、それを文字に寫す上にていへば文辭とす。しかれば、言語・文辭同じものなり。たゞし後世文字の辭を文辭といふより起りて、文辭に限り文章といふは、古意を失ふものなり。(駿臺雜話)

「雪はなほ霏々たり。母が汲み置きし水を見れば……」自然の光景を叙して、讀者の感情を一層強める。前文「颯と吹き來る朝風に地上の雪はくる／＼と捲揚げられて、横に二人の顔を撲つ」なども同じ。

村井弦齋 名は寛。昭和二年歿、年六十五。

駿臺雜話 五卷。室鳩巢の著。

二三 樂 訓

【着眼語】自然の愛好、生活の歡喜。

天地の御惠をうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御心にしたがひ、我が仁心を保ちて、常に樂しみ、溫和慈愛にして情ふかく、人をあはれみ惠み、善を行ふを以て樂しとすべし。人の惡を戒めんため、怒り詈るは、已む事を得ざればなり。常には和樂にして、其の氣を養ふべし。されど又和に專一にして禮なければ、一偏に流れ亂れて樂をうしなふ。

「天地の御心にしたがひ」

「禮なければ」

人のうれひ苦みを慮りて、人の妨となる事を施すべからず。常に心にあはれみありて、人を救ひめぐみ、かりにも人を

「人の妨となる事を」

妨げ苦しむべからず。我ひとり樂しみて、人を苦しむるは、天の惡み給ふ所おそるべし。人と共に樂しむは、天のよろこび給ふ理にして、誠の樂なり。

「人と共に樂しむは」

人を恨み怒り、自らほこり、人をそしり、人の小なる過をせめ、人の言をとがめ、無禮をいかるは、其の器小なり。是れ皆樂を失へるわざなり。怒と欲とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは、器大なるなり。是れ和氣をたもちて、樂を失はざる道なり。

「樂を失へるわざ」

「樂を失はざる道」

心こゝに在らざれば、見れども見えぬ、目の前にみちく、
て、樂しむべき有様あるをも知らず。春秋にあひても感ぜず、

「心こゝに在らざれば」

月花を見ても情なく、聖賢の書に向ひても好まず。唯私欲にふけりて、身を苦しめ、不仁にして、人を苦しめ、さがなく賤しきわざをのみ行ひて、わづかなる命の内を、はかなく月日を送ることをしむべし。

心明かにして、世の理をよく思ひ知り、物に情あらん人は、我が心にある樂を知りて本とし、身の外、四の時、折々につき、天地陰陽の道の行はるゝをもてあそび、天地の内なる萬のありさまを見聞くに従ひて、耳目を悦ばしめ、心を快くし、其の樂極りなくして、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。

世の人、まどしくしては憂ひ苦しき、富貴をうらやみて樂

「私欲にふけりて、身を苦しめ」

「心明かにして、物に情あらん人は」

「其の樂極りなし」

まどしく 貧しく。

なく、富貴にしてはおごり怠りて、欲をほしいままにし、財をつひやして樂を求むれど、欲にやぶられて、かへりて自らくるしみ、人を苦しましむ。すべて富貴も貧賤も、其のねがひ外にありて、内に道を得ざれば、苦のみにて樂なし。

もし此の理を知れらば、身の上につきて樂しみ、外を願ふべからず。貧賤にしても、患難にあひても、時となく所として、樂あらずといふ事なかるべし。坐には坐の樂あり、立には立の樂あり、行にも、臥にも、飲食にも、見るにも、きくにも、ものいふにも、樂あらずといふ事なし。樂はもとより心に生れつきて、身にそへるものなればなり。されど此の樂を知りて樂しむ人すくなし。理くらければ樂を知らず、欲ふかければ樂をうしなふ。(貝原益軒の文による)

「富貴も貧賤も、……内に道を得ざれば」

「理くらければ樂を知らず、欲ふかければ樂をうしなふ」

貝原益軒 名は篤信。又損軒とも號す。儒者。正徳四年(二三七四)歿、年八十五。

二四 詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ

輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セ

ムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ
御名御璽
攝政名

大正十二年十一月十日

〔終〕

語釋

一 自學自習の精神に基き、本文中の語句の解釋を列舉したものである。
一 語意の轉用に就いては、更に辭書を調べる習慣を養ひたい。
一 辭書使用訓練の目的を以て、常に次の要件を見落さぬやうに注意せよ。
イ 訓方。
ロ 文法上の品詞の性質。
ハ 同意語・同音語・對照語・熟語。

一 野菊

野菊 菊科の多年生の草。初秋の頃淡紫色の色を開く。
くぼたみ くぼんである處。くぼたまり。

二 國境

荒涼 クワウリヤウ 荒れはててものさびしいこと。
寒村 さびしい村。
車前草 オホバコ おん

語釋

ばこ。葉は食用に實は薬用となる。
葱坊主 ネギバツズ ねぎの花。小形の白花が相集つて球状をなすゆゑにこの名がある。
駐屯 チュウトン 軍隊が陣營を設けて永く一地にとゞまること。
虎杖 イタドリ 蓼(タデ)科の多年生の草。景趣 ケイシユケシキ。
無造作 ムザツサ。
標石 ヘウセキ しるしの石。

三 靖國社頭に立ちて

社頭 シヤトウ 神社の前。
神垣 カミガキ (一)神社の垣。(二)神社。手向く タムク さゞげる。そなへる。
委ねる ヌダネル まかせる。
散兵壕 サンペイガウ 弾を避けながら敵を射撃出来るやうに設けた壕。
辟易 ヘキエキ 勢に恐れてしりごみすること。

拍子 ヒヤウシ 物のはずみ。とたん。
標識 ヘウシ 目じるし。
逆襲 ギヤクシフ さかよせ。
接戦 セツセン 互に近づき迫つて戦ふこと。
腑甲斐ない いくぢがな
劍戟 ケンゲキ つるぎとほこ。武器。
隷下 レイカ 配下。
諸兵連合の一隊 歩・騎・砲・工等、各種の兵士を含む一隊。
衷心 チュウシン 心からなること。眞情。
慚愧 ザンキ 面目なく思ふこと。はづかしく思ふこと。
餘燼 ヨジン もえのこりの火。もえさし。
杏(エウ)として ぼつた

りととだえて。
通信兵 通信によつて味方の連絡を保つことを任務とする兵。
赤衛軍 過激派の政府を衝(マモ)る軍隊。
燒却 セウキヤク 燒きすてること。
現字機 ゲンジキ 電信を文字にあらはす機械
消耗品 セウカウヒン 使用するたびにへり又は無くなる品。炭・油・紙等。
沈毅 チンキ おちついてしつかりしたこと。
剛膽 ガウタン 膽力がすわつてゐること。
孤立無援 コリツムエン 一人ぼつちで、他に助力する人のないこと。
殉難 ジュンナン 國難によつて一命を捨てた

こと。國難にしたがつて死する。「殉」はしたがふ意。
從容(ショウヨウ)として
おちつきはらつて「從容」はゆつたりとしたさま。

嚴かなることをいふ。「シャウゴン」が正しいが、一般には「サウゴン」といふ。

四 翼

網羅 マウラ 網を張つて魚・鳥を捕へるやうに残らず集めること。「網」は大あみ。「羅」は小あみ。
階級を超越して カイキ
フヲテウエツシテ 階級といふことを頭に置かないで。「超越」とびこえること。
振作 シンサク ふるひおこすこと。
莊嚴 サウゴン たふとおごそかなること。もかうくしいこと。もと佛經の語。衣服宮殿等を立派に飾りたてて

紫紺 シコン 紫がかつた紺色。
漂つて タダヨツテ 一箇所に定まらず浮かび動いてゐて。
椋 ムク 落葉喬木の一種。
すくめて ちぢめて。
動悸 ドウキ 心臓の鼓動。
波動 ハドウ 音や光などのために空氣が振動して上下四方に傳はりゆく状態。
黄枯る キガル 枯れて黄いろくなること。
すつきり さつぱり。
掠めて カスメテ すれ

五 溪を思ふ

背景 ハイケイ 背後のながめ。(一)繪畫で其の繪の中心點の後に描かれる景色。(二)舞臺で奥に見える書割の裝置や景色。(三)轉じて後投者、うしろだての意味にも用ひる。
ほつかりした ぼか／＼ 暖い。のんびりした。あわたましい おちつかぬ。
筏 イカダ 山から伐り

出た竹や木を組合せ水に流して運漕するもの。
鶴鶴 セキレイ 雀に似た小鳥。尾を上下に忙しく動かす習性がある。
木洩日 コモレヒ 梢をとほして射す日光。
おどろ／＼ おどろくばかりに。仰山に。
斷崖 ダンガイ けはしく突立つてゐる岸。
呆氣にとられて アツケニトラレテ 驚きあきれて。
雪解水 ユキゲミツ 峽 カヒ 山と山との間。
ほの白く かすかに白く。ほんのりと白く。身じろぎ 身動き。まぼろし そこにもありませぬ物の姿が現にある

六 小鹿の家

造詣 ザウケイ 學問又は技藝が深く進むこと。
頓才 トンサイ その場の出来事を、見事に取りさばいてゆく頭のはたらき。きてんがきくこと。
歌の詠み口 歌の作り方。
ちよつかいを出す 手出しをする。相手がうけ答へをするやうに、からかひ半分にしむけること。
即座に ソクザニ すぐさま。其の場ですぐ。御所車 ゴシヨクルマ 牛に曳かせる車の一種。昔、身分のある人が乗つたもの。
式臺 シキダイ 玄關に設けた板じき。
惡戯な イタヅラナ

やうに目に見えて、やがて消え失するもの。おもかげ すがた。かたち。
寂寥 セキレイ さびしさ。

味氣ない アヂキナイ つまらなく、なまけない。張合ひのない。
神祕 シンビ 普通の人智では容易に知り難いこと。
緒 イトグチ はじまり。手がかり。
處置する とりさばく。きまりをつける。あてが外れる 目あてをとり失ふ。

暴な。
モーカ メーヨー女史と共同生活をしてゐる婦人の名。
新教 シンケウ 基督教の一派。ローマ舊教に反對して獨逸のルーテル等が唱へたもの。
天主教 基督舊教の一派。羅馬法王を教主と仰ぐもの。
國際的精神 各國の人々が、互の立場をよく理解して、親しく交際する心がけ。
涵養 カンヤウ 學識・氣質を養成すること。「涵」は、ひたす。
輪廻 リンエ 佛經の語。人の生死、事物の興亡などが、絶えず移つて行つて、恰も車輪の廻りて際限のないやうだといふ意味の語。

「リンネ」と發音する。理解 リカイ その事の道理を悟りしること。
七 三人の時計
ドン 正午を報ずる大砲の音。午砲。
質 タチ 性質。
俯向いて ウツムイテ 罵る ノノシル 荒々しい聲で答(トガ)める。かつきり 丁度。びつたり。
利口 リコウ

八 茶話

通曉 ツツゲウ くはしく知つてゐること。「曉」さとの。
古今傳授 コキンデンジユ 古今和歌集中の秘傳としてある難解の語の意味を口傳すること。

趣向 シュカウ しくみ。工夫。
九 人生の急所をきめる人
急所 キフシヨ 大切な點。かんじんな箇所。支配されがち 常に自由にされる。
營々 エイエイ ぼねをりつとめるさま。
成就 ジャウジュ 仕上ること。出来あがる。思ひが内に熟す ある考へが十分に心の内に纏まる。
ためらはず ぐづ／＼せず。猶豫しないこと。祝福される 神から幸福を與へられる。
擇ぶ所がない 少しもちがはない。
經驗する 實際にためし試みる。

眩を睨る ヒトミラミハル 目を大きく見ひらく。
グード・ナイト おやすみなさいの意。
花産 ハナゴザ 野趣 ヤシユ 田舎らしいおもむき。いかにも飾りけのない、自然のままのもつ情趣。
ふくよかな ふつくりとした。肌觸りのふつくりと柔かさうな。
ハウス・ウオーミング 新宅祝ひ。
狼藉な ラウゼキナ 亂

一〇 心の置所
斯道 シダウ この道。こゝでは、劍道を指す。
廻歴 ヘンレキ あまねく歩まはること。
容赦なく 遠慮なく。用を叶(カナ)へ 用事をはたす。

肝要 カンエウ 大切。どつこ どっこ。いづこ。十方 ジツバウ 東西南北の「四方」と、四方の間の「四隅」と、上下の「二方」と。
 禪劍一如 センケンイチ ニヨ 禪宗も劍道も、修業工夫を重ねてさとりを得ることは一つである。
 垂示 スキジ 教へ示す。
 うつる から。からつぽ。空虚。

一一 伊勢參宮
 五十鈴川 イズミガハ 御裳瀧川(ミモスソガハ)ともいふ。神宮の側を流るゝ川。
 千木 チギ 神社の棟の

兩端の上にて交叉し高く空にさし出た木。堅魚木 カツラギ 宮殿又は神社の棟木(ムナギ)の上に並列してゐる圓くて長い木。中央がふくらんで盤節に似てゐるからの名。隨く ヒザマツク 現 ウツツ 夢とも正氣ともつかぬやうな心の状態。
 敬虔 ケイケン うやまひつゝしむこと。すくゝ 上に眞直のびてゐるさま。
 大廟 タイベウ 伊勢大神宮。初祖のおたまやの義。
 御手洗川 ミタラシガハ 神社の近くを流れて、參詣者が口をそゞぎ、手水を使ひなどする川の意。

雅樂 ガガク 正しい音樂の意。日本の大昔からの歌舞・音樂及び中古に唐・三韓などから傳來した樂の總稱。朝熊山 アサマヤマ をろがみて 拜して。弓矢輦の音聞かぬ國。争などのおこらぬ國。「輦」トモ。弓を射る時左の臂にかけた革製の具。弦をあてて威容を示したものと云ふ。
 可能性 カノウセイ 成りたち得る性質。消極的 セウキョクテキ 退き守る上にいふ。「積極的」の對照語。
 皇御孫 スメミマ 天皇。天照大御神の御子孫。天孫。
 積極的 セキキョクテキ 進取を主として考へるのにいふ。

光明的 クラウメイテキ 常に前途に光明を認めゆくこと。一大進展を遂げんとする状態である。
 一一 海濱の草
 塘 ツツミ 堤。
 長汀曲浦 チャウテイキヨクホ 長い水ぎは、弓なりに曲つた海岸。
 蔓荆 ハマゴウ 馬鞭草科に屬する落葉灌木。枝は池を這ひ、處々に鬚根を生ずる。葉は楕圓形、表面は深綠色、裏面は白色をなす。夏の頃梢頭に花を開く。
 風情 フゼイ おもむき永劫 エイゴフ 「劫」は佛教でいふ非常に長い時間の單位。永久。
 玫瑰 ハマナス 薔薇科に屬する落葉灌木。夏の頃、薔薇に似た花をす

萬機ノ政 バンキノマツリゴト 多くのまつりごと。
 御親裁 ゴシンサイ 御みづからおとりさばきになること。
 徳教 トクケウ 道徳上の教。
 大憲 タイケン 憲法。膺懲 ヨウチュウ 道にそむくものをうちこらすこと。
 師 シ 軍勢。軍隊。宏談 クラウボ 天皇が國家をお治めになる上の大きな御はかりごと。
 雄圖 ヌウト すぐれた御くはだて。
 瀟酒 セウシヤ さつぱりとして綺麗なこと。
 絨毯 ジュウタン 花模様をあらはした厚い毛織の敷物。

恐懼 キョウウク 恐多く思ふこと。
 推測 スキソク おしはかること。
 斯民 シミン この民。わが國民。
 桐火桶 キリヒツケ 桐で作つた丸火鉢。
 おほかる 多くある。しづ 賤しい民。ふせや あばらや。軸物 ギクモノ 床の間の掛物(かけもの)のこと。
 仔細 シサイ こまかに。くはしく。禿び チビ すり切れる。
 慙愧 ザンキ 心に恥ぢ入ること。
 上奏 ジヤウソウ 天皇に申上げること。
 裁可 サイカ 君主が臣下の伺ひ出たことを親

裁して許可したまふこと。
 主務者 シユムシヤ 大臣。
 署名 シヨス 書きしるす。署名する。
 隨時 ズキジ いつでも。折々。
 詠草 エイサウ 歌のしだがき。
 御歌所 オウタドコロ 反故 ホウゴ・ホリダ・ホク・ホゴ。
 冗費 ジョウヒ むだなものいり。
 一天萬乘の大君 天下を治めたまふ大君。
 隆々 リユウ 勢の盛なさまをいふ。
 服膺 フクヨウ 心に留めて片時も忘れぬこと。
 應分の責獻 オウブンノコウケン 身分相應の働をして國のためにつ

くすこと。
 一一 櫻井驛
 荒くれ者 亂暴者。申し開ける 言ひ聞かせる。
 行々子 ヨシキリ 燕雀類の鳥。
 黯然 アンゼン 悲しさのあまり心がぐらくなるのにいふ。
 死を必ずする 死を覺悟する。必死。
 猶豫 イウヨ ぐづぐづして決心しないこと。
 狐疑 コギ 疑ひためらふこと。
 疾風迅雷云々 シツプウジンライ 軍の急なるにいふ。急な風と共にはげしく雷鳴して、耳をおほひかくすまがないやうに、にはかに攻めよせて敵の不意を

つづく。
 杞人の憂 キジンノウレヘ ひとりこし苦勞。やくに立たぬ心配。
 天空海潤 テンクウカイクワツ 空や海の如く非常にはろくとしてゐること。
 熟讀玩味 ジュクドククワンミ 充分によく讀んでその意味を味ふこと。
 お上 オカミ 主上。後醍醐天皇を申す。
 綸言 リンゲン。みことのり。天子の御言葉。
 指南車 シナンシヤ 方向を指し示す車。よき方向に教へ導く意とする。
 王佐 ワウサ 帝王をお輔け申すこと。
 資 シ 助け。參考材料。甘言 カンゲン 口先だ

けの巧い言葉。肝に鍊(エ)りつく。忘れぬやう充分に心にとゞめおく。

一五 維新の大精神

國是 コクゼ 輿論の善しとする所の方針。即ち國家の大計。不磨 フマ 磨りきれぬこと。永久に存在すること。千古不磨。寶典 ハウテン 最も珍重すべき書。起草者 キサウシヤ はじめ其の文の草稿を書いた人。毫も ガウモ 少しも。中外 チュウグワイ(一) 朝廷の内と外と。(二) 國內と外國と。こゝでは天下。國內の意。萬機 バンキ 多くの政

治。「機」は幾に同じ。多くの幾微を謹む義から政治の意とする。公論 コウロン 世間一般の人の意見。公平なる言論。輿論。語る ハカル 問ひはかる。經綸 ケイリン 國家を營み治めること。庶民 ショミン もろもろの民。衆民。陋習 ロウシフ 悪い風習。いやしきならはし。陋俗。中樞點 チュウシュテン 最も大切な中心點。中心となつて最も肝要な所。糟粕 サウハク 廢棄したつたらぬもののため。へ。かす。(一)酒のかす。(二)よい所をとつた後の不用物。

執着 シフチヤク 心に深く思ひこむこと。心が物につながれる意。必須 ヒツシュ 是非必要なこと。必ずさうすべきもの。停滯 テイタイ 久しく同一の状態にとゞまつて少しも進歩しないこと。滯滯。舊例故慣 キウレイコクワン 古くからのしきたり。株守 シュシュ いつまでも古い習慣を守つて、場合によつて適當な方法をとることを知らぬ者を嘲つていふ。變革 ヘンカク かへ改めること。改革。變改。

「伴侶」なかも。とも。慰藉 キシヤ なくさめ。愛嬌者 アイケウモノ かはいらしいもの。愛敬(アイキヤウ)者。萬年青 オモト 寵愛 チョウアイ ひとくかはいがること。牛蒡抜き ゴバウメキ 根ぐるみすつばりと抜きとること。

のが其の郷國をさしていふ。拇指 オヤユビ。徑路 ケイロ みち。すぢみち。經路。動悸 ドウキ 寝耳に水の 不意におこつた。朴訥 ボクトツ かざりけがなく、口數が少いこと。寡言 クワゲン 口數の少いこと。機智 キチ その場合に應じて都合よく働く才智。やをら そろ／＼。しづかに。

一八 茶の間

茶の間 チヤノマ 家族が食事などする室。地蟲 チムシ 黃金蟲科の昆蟲の幼蟲。いもむ

一六 鸚鵡

鸚鵡 アウム 好伴侶 カウハンリヨ 慰めになるよい相手。

く行かぬは、人の心の持ちかた次第である。便(タヨリ)とする あてにする。飼はずなりにき 飼ふことをやめてしまつた。紫野 ムラサキノ 京都紫野大徳寺。すべての事にかよひてすべての事にあてはまつて。棄恩云々 恩愛の情によつて生ずるまよひから逃れて、さとりをひらき佛の道によつて父母を救ふこそ、ほんたうに恩にむくいる道である。

みづからゆるす 自分で心をゆるめる。邪氣に感胃する かぜをひきこむ。きざす おこりかける。

對して責任者となることを證するため、手形の裏面に其の旨を記して署名捺印すること。果 ルキ、わづらひとなること。かかりあひ。まさぞへ。許多 キョタ あまた。多く。

るさま。ちら／＼。凜冽 リンレツ 寒さのはげしいさま。満目蕭條 マンモクセウ デウ 見渡す限り物さびしい。暮霰朦朧 ボアイモウロウ タぐれのもやがおぼろに立ちこめてゐること。皚々 ガイガイ 雪や霜の白いさま。踏みも習はぬ あるきつげもしない。彌指す イヤマス いやよはげしくなる。骨に徹る ホネニトホル 骨にしみとほる。深山路 ミヤマヂ 進退谷る シンタイキハマル 途方にくれる。そゞろに 何とはなしに。何故ともなく。須臾 シュユ しばらく。

一九 マツチ賣の娘

芍藥 シヤクヤク 牡丹屬の多年生の草。跣足 ハダシ 襪履 ボロ 紗 シヤ 織物の名。うすぎぬ。

二〇 雲萍雜誌抄

明けくれ 朝晩。時刻は人のうへにあり 時刻を正確に保つて行

守邪 シュジャ 病氣(邪)にかされぬやうに心をひきしめて身を守ること。樞要 スウエウ 最も大切なこと。

手形 テカタ 金錢の支拂を目的とする證券。爲替手形。約束手形。小切手等。裏書 ウラガキ 手形の讓渡人が、その手形に

拂はまし 拂ひたいものである。櫻狩 サクラガリ 山野に櫻を尋ねて花を見あはるること。霏々 ヒヒ 雪の盛に降

二二 近江聖人の幼時

須臾 シュユ しばらく。

衛門 カブキモン 冠木門。
築地 ツイヂ 土塀。
脩竹 シウチク 長い竹。
許多 キョタ あまた。
なまなかに なまじひに。なまじに。
千仞 センジン 一切は支那周尺の八尺。
屹として キットシテ 屹む ウルム。
屹ちんと形をあらためて。

二三 樂訓
人にしあれば 人なのであるから。「し」は強めの詞。
仁心 ジンシン なさけ深い心。
流れ亂れて うちとけず ぎて憤みがなくなり。慮る オモンバカル 考へる。察する。
其の器(ツッハ)小なり その人物が小さい。
心こゝに在らざれば 心がこゝにないなら。うはのそらであつたなら。
さがなし 善くない。不都合である。
はかなく とりとめもなく。何といふこともなしに。
四の時 四季。
手のまひ云々 手足の置場がわからぬほど非常にうらしいこと。
まどし 貧し。
ほしいまま 思ふ存分。知れらば 知つたならば。

二四 詔書
涵養 カンヤウ 自然にしみこむやうに教へやしなふこと。

振作 シンサク ふるひおこす。
國本 コクホン 國の基
淵源 エンゲン 根源。
昭示 セウジ あきらかに示す。
訓ヲシヘ
申ねて カサネテ
荒怠 クワウタイ 心のしまりがなくなつて怠ること。
洪謨 コウボ 大いなるはかりごと。
夙夜 シュクヤ 朝早くから夜おそくまで。
兢々 キョウキョウ 安心の出来ないさま。
紹述 セウジュツ 前人のあとをうけつぎ従ふこと。
災變 サイヘン こゝでは、大正十二年九月一日の關東大震災を仰せられたもの。
憂悚 イウショウ 心配とおそれ。
交々 コモム 近來。
軌近 バンキン 近來。ちかごろ。
浮華 フクワ はでやかで重々しくないこと。
放縱 ハウショウ わがまゝなこと。
輕佻 ケイテイ かるはずみなこと。
詭激 キゲキ ことばや行ひが中正を失つてはげしいこと。
時弊 ジヘイ その時代に一般にはやるわるい點。
前緒 ゼンシヨ 前の時代に築いた仕事。
紹復 セウフク つぎおこす。
協戮 ケフリク 力をあはせること。
更張 カウチヤウ 今までゆるんでゐたことを引きしめ改めてきかんにすること。
格適 カクジュン つゝしみしたがふ。
綱紀 カウキ (一)物事のしめくまり。(二)國家の政治。
肅正 シュクセイ とりしまつて正しくする。
匡勵 キヤウレイ たゞしはげます。
醇厚 ジュンコウ 人情にあつく、うすつべらでないこと。
誼ギ よしみ。したしみ。
福社 フクチ さいはひ。
恢弘 クワイコウ ひろめること。

——〔終〕——

オ

まく 屋
まつ 戒臘
ぞん 溫溫 蕙袁 園遠 怨苑 宛穩

此ノ外ハ大抵おノ假名。

甲申鳥山

せう 此ノ外ハ大抵しう(じう)ノ假名。
せう 小少 抄鈔 宵稍 霄消 稍硝 道銷 哨哨 召昭 詔詔 沼招 韶簫 簫嘯 瀟焦 焦焦 樵樵 樵樵 笑燒 椒
鹿鹿 鹿鹿 鹿鹿

べう 豹李
ひよう 苗描 猫貓 鈔鈔 渺廟

此ノ外ハ大抵ひやう(ひやう)ノ假名。

はふ 法彦(漢音)

字音假名遣一覽表

本表は記憶の便宜上少数の漢字音假名遣を挙げ、他は之を類推せしむる。漢音・吳音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を掲げ、一覽に便した。

Table with columns for phonetic groups (イ, エ, オ, カ, キ, ケ, ゲ) and rows for specific characters (あ, い, う, え, お, か, き, け, げ). Each cell contains a list of kanji characters and their corresponding phonetic readings.

大正十三年十月三十日 發行
 大正十四年二月九日 訂正再版發行
 昭和五年九月二十六日 第二版印刷
 昭和五年九月二十九日 第二版發行
 昭和六年一月二十八日 第二版訂正再版印刷
 昭和六年二月一日 第二版訂正再版發行

女子國文新編(第二版)全十册奥附	定價
自卷一	各
至卷六	金六拾壹錢



著者 垣内 松三
 發行者 株式會社 文藝學社
 印刷所 文成社
東京市神田區美土代町二丁目一番地
 東京市神田區龜町三丁目二十五番地

發兌
 東京市神田區美土代町二丁目一番地
 電話 三三五八番
 株式會社 文學社

關西一手販賣所
 大阪府北通二丁目
 電話 七五四三番
 株式會社 盛文館

入江塾
 一月



入

江

歌

子

算子年

入江歌子